

## 人家和歌集（解説・錯簡考と翻刻）

福田 秀一

要旨 鎌倉時代反御子左派の私撰和歌集の一つ「人家集」は、永く伝本が知られず、かつては散佚したものと思われていたが、先年巻八々十の零本ながら大倉山精神文化研究所本が発見・紹介され、その後全く同内容の島原松平文庫本も知られるに至った。

ただ、この両本の本文には祖本の錯簡と脱落に起因する錯乱があつて、今まで十分活用されていない憾みがあつた。筆者は現存本の本文を種々検討した結果、その錯乱をかなり復元し得たと信ずるので、今回未翻刻の島原松平文庫本を一先ずそのままの形で翻刻した上、推定し得た限りの復元案を示し、かつ若干の解説と復元根拠とを述べて、索引等を付した。

## 一、はじめに

「代集」にその名が見え、「夫木抄」にも（伝本によって集付に若干の異同はあるが）二十首近く採られている。「人家集」（六条行家撰）は、永く伝本が知られず、かつては散佚したものと思われていた。

ところが先年、水沢利忠氏は大倉山文化科学研究所（当時は国立国会図書館支部大倉山文化科学図書館、現称は大倉精神文化研究所）に蔵せられる一冊本（但し巻八の十の零本）を発見され、先ず同本の大要を報告された（『人家和歌集の研究』、『大倉山学院紀要』第一輯、昭二九・一二）後、書誌・成立・作者考証等を内容とする解題と初句および作者の索引とを付して、同本を翻刻された（『人家和歌集』、『大倉山論集』第五輯、昭三二・三）。

この水沢氏の発見と紹介は、中世和歌研究の上にかわめて有益であったが、惜しむらくは同本が僅か三卷（原形は十卷か）の零本である上に、本文に祖本の錯簡に基く錯乱や欠脱があることを見落され、ために現存部分も資料的に十分利用しがたい憾みがあった。筆者は早くそのことに言及する（『和歌口伝』の著者源承の作歌生活）、『国語と国文学』昭三三・六、『中世和歌史の研究』第二篇第二章Ⅱ）一方、他のケースと同様に完本もしくはよりよい伝本の出現を期待しつつ多少の探索も心がけてきたが、その後知られた島原松平文庫本も、後述の如く大倉精神文化研究所本ときわめて近い関係にあって、拙著（前記、一九一頁注7後半）に記した通り、内容や本文の錯乱状況も全く同一である。

そこで今回は、島原松平文庫本を底本とし、大倉精神文化研究所本による校合を加えて現存本の本文を示すと共に、筆者の認める錯簡の跡を例示して本文の錯乱をできる限り復元し、資料的にも内容的にも本集が今後一層活用されることを期待したい。ただ、現存本には途中で欠脱があるため、その錯乱は今回相当に訂し得たと思うけれども、遺憾ながら完全な復元には至り得ないことを、あらかじめ断っておく。

前述のように、「人家集」の伝本としては、現在のところ大倉精神文化研究所蔵本と島原公民館蔵松平文庫本との二本（いずれも巻八の十の零本）しか知られていない。そこで先ず、この両本について、書誌の概要を記しておく。

1 大倉精神文化研究所蔵本（図書番号B―18）

この本については水沢氏（前記函文獻）の報告もあるが、先年（昭和三十一年）の筆者の実見を加えて記せば、二九・五×二二・〇種の斐紙（楮を交漉）袋綴一冊本で、表紙は縹色、左上に「人家和歌集」と打付外題（恐らくは本文と別筆）。墨付五四丁、一面一〇行、一首一行書。第二丁表から書き起し、作者名は歌頭より約三字下げ、題・詞書は歌頭より一字下げ。江戸初中期（寛文頃）写。奥書等なし。ままた不審紙がある。前見返しに「大倉精神文化研究所附屬図書館蔵書」の朱方印を捺し、また「二五八九 六・一九」（原文横書、算用数字）の登録印がある。すなわち昭和四年の登録である。第一丁表一面の影印が、水沢氏の翻刻に添えられている。なお、八八頁追記参照。

2 島原公民館蔵松平文庫本（二二九―二〇）

この本については、昭和三十七年度文部省科学研究費（総合研究）によって調査し撮影もしたが、一七・三×二〇・二種の楮紙袋綴一冊本で、表紙は藍色地に唐草文様、左上に小紙片を貼って題簽とし、「人家和歌集」と墨書（本文とは別筆）、墨付五四丁、前後遊紙各二丁。一面一〇行、一首一行書。第一丁裏から書き起し、末尾に「尚舍源忠房」および「文庫」（文字ハスキ）の印がある。島原松平本の多くと同じく江戸初中期（寛文頃）の書写で、ほぼ同時期の書写

と見られる大倉山本と比べると、錯乱の状態から配行・字高、更に漢字仮名の使い分けや仮名の字体までかなりよく一致し（但し作者名は歌頭より約二字下げ）、両者はきわめて近い関係にあるものと考えられる。あるいは両者が共通の親本を転写したものであろうか。まま見られる両本の異同、例えば三二番歌の二句や四〇六番歌の前の詞書の書き方（大倉山本は四四三の詞書「日吉社に……懐」と四〇六の題「寄花無常」とを一続きにしまっている）、そして島原本に多い見せ消ち訂正箇所等によれば、大倉山本が島原本を転写したことはあり得ても、その逆はあり得ない。

### 三、錯簡小考

#### 1 現存本文の錯乱

現存する「人家集」の本文に錯乱や脱落のあることは、本文を一見すれば明白と思うが、念のため証例を挙げて若干の付言を試みる。引用本文と歌番号は後掲の翻刻によるが、歌番号はかつて水沢氏の付されたものと同一である。

(一) 作者名が掲げられて、その後に題・詞書および歌が続かない例。

(例1) 二九三の次は、次のようになっている。

道意法師一首

安嘉門院右衛門佐八首

文永八年七月七日白河殿百首に鶯

二五四鶯も物うからてやふくかせの（後略）

本集は、かつても一言した（前記拙稿・拙著）し一見しても明らかのように、「作者別に類聚して一人の作を一箇所  
に集め、作者の地位身分によつて巻を分けてゐる」のであって、作者別に集められた歌群（一首または二首以上）の前  
に、いわば小見出し（以下、標記もしくは標目と呼ぶ）として「誰某何首」と記す体裁をとっている。従つて、ここに  
「道意法師一首」とのみあつてそれに相当する歌とその題もしくは詞書がないのは不審で、元来「安嘉門院右衛門佐  
八首」へ続いていたのでないと考えられる。

(二) 題もしくは詞書があつて、その次にそれに相当する歌のない例。

(例2) 一七の次は、次の如くである。

文永七年八月十五夜内裏五首哥秋曙

全教法師一首

題不<sub>レ</sub>智

一七花は猶心もしらすはるのよの（後略）

(例3) 三五の次も同様である。

前関白左大臣家の百首に

上海法師三首

百首哥中に

三六 月をさへかさねてそまつ郭公（後略）

これらはそれぞれ、「文永七年……」もしくは「前関白左大臣家……」の詞書を受ける歌が右の部分に落ちていることを示している。三〇六の次も同様である。

また、次のようなケースもある。

(例4) 二〇四の次を挙げてみる。

月前萩

夏哥中に

二〇五 すみ染の袖のよそ成あやめ草(後略)

(例5) 二一六の次も同様である。

秋の哥に

浦月をよめる

二一六 秋のよの月にはつらき煙とも(後略)

これらの場合は、それぞれ題ないし詞書が二つ並記された形になっており、初めの題・詞書すなわち「月前萩」「秋の哥に」に相当する歌がないのは不審である。例5の場合は、水沢氏の翻刻では二一六の詞書「浦月をよめる」が他の題・詞書より一字下げて組まれており、その前行の「秋の哥に」が「浦月をよめる」を優位に包括して二一六にかかっているかの如くにも読み取れるが、「浦月……」の一行は大倉山本でも右に示したように「秋の哥に」と同じ高さに記されており、不審は消えないのである。

題もしくは詞書同志が続いて初めの題・詞書を受ける歌が脱けているという、同様なケースは、右の他に三五・三七・三九・四〇の各歌に続く部分などにも見られる。また四の如きは、一見何の問題もないかの如くであるが、よく見ると題（海辺時雨）と歌とが合っておらず、そこに本文錯乱の疑がある。

(三) 各歌人の入集歌数が、標目すなわち各人の歌群の冒頭に作者名に続けて記されたものと相違するかに見える例。

(例 6) 三の次に「前大僧正澄覚十五首」とあるが、続いて挙げられている歌は三四の九首であって（かつ三・四・五・六は確かに澄覚の歌である。後掲本文脚注参照）、四の次には次の作者名「権律師円勇十五首」が来ている。

(例 7) 七の次に「禅空上人五首」とあるが、そこに挙げられたのは五・六の二首に過ぎない。

(例 8) 八の次に「順真法師三首」とあるが、次の作者名「心海上人六首」の前まで続く歌は八・九の八首である。

こうした例は、巻十の首尾すなわち式乾門院御匣・平親清女妹のケースを含めて、全体に甚だ多い。それらについてかつて水沢氏（前記翻刻の解題）は、例 6 の澄覚について「十五首とあるが実際には九首である」という風に、歌数に誤写もしくは誤記があると考えられたようであるが、これだけ例が多ければ、本文の錯乱もしくは脱落を疑うべきである。

#### (四) 巻十における作者の順序

現存三巻のうち、巻八・九の両巻の作者は僧侶のみであるが、巻十には女子と僧侶が混在している。すなわち、一応現存本の作者表記に従って巻十の構造を追って行くと、次のようになっていく。今、便宜標記の下に該当する歌番号と必要な注記とを加えておく。

式乾門院御匣廿二首（一見一四一四五の五首しかなく、その不審は(四)にふれた）

静範法師六首（四六一五）

源勝法師一首（五二一秀、不審）

安嘉門院高倉三首（二五二五九）

今出川院近衛十三首（一見一六一七の十二首しかなく、かつ二七の後の部分の不審は(二)に例2として挙げた）

全教法師一首（一七〇）

西門法師三首（七七一七五）

定宣法師二首（七六一七七）

本蓮法師三首（一見一七六一六の九首となり、不審であるが、一六は後掲本文の脚注に示す通り中納言典侍||典侍親子朝臣の作である）

室町院中納言二首（一見一八七一六の十二首ということになって不審であるが、一八・一九は水沢氏も指摘された通り定円の作である）

猶貞法師二首（一九一〇〇）

宝遍法師二首（二〇一〇三）

玄覚法師四首（一見三三三三五の二十三首のようであるが、三四と三五との次に錯乱・脱落が考えられることは(四)の例4・例3で

述べた。また、三〇六・三〇九・三一三は勅撰集その他によって式乾門院御匣の作、三二七・三二九・三三三は同様に尚侍家中納言||典侍親子朝臣の作と判る。これらのいくつかについては、水沢氏も気づいておられる）

上海法師三首（三六一三六）

寂忍法師三首（三九一三二）

寂音法師二首（一見三三三三の五首のようであるが、三五・三六は水沢氏や拙稿が指摘したように源承の作である）

（中略）

法印尊家二首（四〇一四四）

法印公宗二首（一見四四一四五の四首となり、不審）

法眼有海二首（四六一四七）

法眼覺基三首（四六一四八）

法眼源承三首（一見四六一四九の十七首となるが、四三・四四は鷹司院帥の歌であり、一方源承の少くとも二首は三五・三六にあった）

平親清女妹七首（一見四六〇五三の三十五首となるが、四六・四九・五二は法眼源全の名の下に見える四六と共に実伊の作、四六・四九

―五三は後深草院弁内侍の作）

卷八・九が僧侶しか収めていないのに対して、卷十では右に首尾を示したように女子群と僧侶群とが頻繁に交代しており、しかもその交代の行われる箇所では殆んど常に本文の連続に不審が見られる。このことは、(一)〜(三)ほどには客観的でないにしても、少くとも現存本の卷十に何らかの錯乱や脱落のあることを疑わせる、相当に有力な微証であろう。

(四) 僧侶の順序

次に、本集に採られた僧侶の官位表記もしくは称号に着目してみると、卷八は前大僧正に始まって以下権律師・法橋と、この順に三種で一応すっきりしているが、卷九では上人―法師―上人―法師―権僧正―前権僧正―法師となっていて、やや乱れた感じがあり、卷十では更に複雑になっている。すなわち、四でも問題にした現存本における卷十

の構成を、一応各標記の作者を信じて、今度は作者の身分別に全部羅列してみると、次のようになる。

女子 (四二一四四) —— 法師 (二六六二五) —— 女子 (二七一七) —— 法師 (二七一六) —— 女子 (二七一六) —— 法師 (二九一三六) —— 法眼 (三七一四五) —— 權僧正 (二六六二五) —— 女子 (二五二六) —— 法師 (二九一三の次) —— 女子 (二九一三六、後文参照) —— 法師 (三九三三) —— 女子 (三三三三九) —— 法師 (三三三三九) —— 權大僧正 (三三三三九) —— 法印 (三三三三九) —— 權少僧都 (四〇〇四〇) —— 法眼 (四〇四二) —— 法印 (四三三四) —— 女子 (四三三四九) —— 法印 (四三三四九) —— 法眼 (四三三四九) —— 但し四七五以下については四参照)

しかも右に「女子」とか「法師」とか一括した一群の中に実は他の群(女子に対して法師や法印とか法眼に対する女子とか)の作者が入っていると他の撰集等で判明するケースのあることは四でもふれたが、ここでもう一つその例を挙げると、「新院弁内侍十一首」と標記されている歌群(三〇一三六)の中で、少くとも三〇四三・三〇五三・三〇七の三首は、水沢氏も注しておられるように法印もしくは前大僧正良覚の作である。

こうした例は他にもあるが、そういった群の内部に立入らなくとも、右に示した巻十の構造を一見しただけで、一応の不審は生ずる。本文の錯乱を疑う客観性は四より更に弱くなるであろうが、四と併せて考えたとき、元来は僧侶と女子とが別々にまとめられていたのみでなく、僧侶は僧位僧官等の称号別にまとめられていたのではないか、更に言えばそれが一定の順序で、恐らく僧正・法印あたりを先頭に、僧都・律師と法眼・法橋との順序は検討の余地があるかも知れず「上人」というのも位置に問題はあるが、「法師」とのみ記された、いわゆる凡僧を最後に置いて、一定の規準による配列をとっていたのではないかと思われ、そうなると巻十に見られる混乱は巻九から更に巻八とも関係して、現存本の祖本(成立当初の原本とは限らない)がある時期にこの三巻にわたるかなり大きな錯簡(それに後述から明らか如く脱落も)を生じたのではないかという推測が考えられよう。

(六) 現存三巻の構成

最後に、現存三巻に収められた歌数を見ると、

巻八 七十二首

九 六八首

十 三六二首

と、いかにもアンバランスである。これと四あるいは(田)に言及した事実とを併せ考えると、現存本の巻十には元来巻八もしくは巻九に入っていた歌がかなり混入していることを疑ってもよさそうである。それとこの集の構成や題号とを勘案すれば、巻十は元来女子のみから成り、僧侶の歌は巻八・九の両巻に収められていたと考えてよいのではなからうか。原形についてのそれ以上の推測は、項を改めて述べる。

2、復元推測の手がかり

前項の指摘・考察によって、現存本の本文に恐らくは祖本の錯簡（それにあるいは脱落も）による錯乱もしくは欠脱のあることは明らかになったと思うので、次にはそれを原形に復元すべく、その手がかりを考えてみたい。

その手がかりとして、筆者は以下のような事実を規準として採用しあるいは想定する。

イ、作者名表記の下に付された入集歌数は信じ得るもので、現存本の実態がそれと合わぬ箇所には、錯乱もしくは欠脱がある。

前項の(三)に対応するもので、そこに挙げた例6で言えば、そこに注したところから三四の九首は前大僧正澄覚の

歌と認めてよきそうなので、彼の作が四の後に更に六首あったものと考えられる。この通りの例は他にはないが、卷十に「権大僧正公朝廿八首」とあって三三三の八首しか挙げられていない部分は、これに類する。但しその八首の中で他書によって公朝の作と確認できるのは三〇のみであり、一方四四に彼の作があるので、現存本で公朝の作とされている歌群(三三三)の末尾に問題があることは確かであるが、三〇以後のどこから四四以前のどこへ続くべきかは、これだけでは推定できない。

一方、例7に示した「禅空上人五首」とあって一見二首しか挙げられていないケースや卷十の首尾の「式乾門院御匣廿二首」「平親清女妹七首」の例など、前項(三)で指摘したように本文に問題があることは確かで、やや具体的には四に列挙した折にも記したが、それらの箇所への復元には、他の規準をも併用しなくてはならない。

ロ、中世の他の撰集や定数歌・歌合などに見える歌の場合は、それらに記された作者名を尊重する。

これは、すでに水沢氏(前記解題)も部分的に採っておられるところであるが、前項四などにも一部示したように、これによって現存本の錯乱を指摘できる箇所は多く、かつ右に公朝についてふれたように、ある程度まで本文復元の手がかりとすることができる。また、一五三は後鳥羽院二条の歌であるが、彼女の名が標目の中に見えないことは、現存本文に欠脱があることを疑わせる。

ハ、一人の作者の歌は「誰某何首」という標記の下に一箇所に集められているだけでなく、各人の歌群自体は四季恋雑の順に配列されていると考える。

これは、イ・ロの規準によって本文に錯乱・欠脱がないと考えられる「前大僧正公豪九首」(二一七)や「前大僧正隆

弁十七首」（二二二）、特に「権律師円勇十五首」（四一七）から帰納されるもので、本文に錯乱がある巻十の中で、口の規準によって知った各歌の作者が同一人となる群においても、この法則は当てはまる。例えば「鷹司院帥卅五首」とある歌群は現存本の形態では二十五首（二五九―二六一）しかなくて前項(四)の不審があり、規準イによって検討すべき箇所であるが、規準ロによれば、その中の二六六―二六三の十六首は目下他書に見られない二〇二―二〇三の三首を除いて藻壁門院少将の歌で、しかもこの十六首は四季恋雑の順に並んでいる。すなわち法則ハが成り立つのである。

ここで改めて現存本が「鷹司院帥卅五首」と標記している歌群を見ると、二五九―二六七は春から夏へかけて季節の順に並んでいるのに、二六八に至って夏から春へ戻っており、今用いている規準に合わない。今の場合二六六が鷹司院帥の作でないことは、たまたま他書によって証明されているが、たとえそうした明証がなくとも、二六七―二六八の間が元来続くものでなかったことは、この規準ハからも言えるのである。

一方、右の考証（決め手としては規準ロ）によって二六八―二六三の十六首は藻壁門院少将の作と判明したが、それは二五七の次に記された「藻壁門院少将十六首」と正に符合する。すなわち本集に収められた藻壁門院少将の歌は二六八―二六三の十六首であって、「冬廿二」と詞書する二六五は彼女の歌ではないのである。現存本の形態を信ずれば二六五のただ一首となることは、すでに規準イにも反しているが、十六首もある筈の歌群が冬の歌から始まることもハの基準から不審と言うべく、かりに二六八―二六三が存在しなくても、二六五を藻壁門院少将の作と考えることは、かなり困難である。

この規準ハを用いると、他にも何箇所か錯乱を指摘することができ、その意味ではそうした箇所や現象は前項に(一)の(四)の他に立てて説くべきであったかも知れないが、今は論旨を戻さず、問題の箇所を指摘するに止めたい。いずれも規準イをも適用すべき箇所であるが、二五〇―二五二の続き、二六六―二六七の続き、二五五―二五六の続き、四四四―四四五の続きなどが、この規準から見ても元来統いていなかったものと考えられる。また、四九三は雑（述懐の如くであるが、「玉葉集」では釈教の部

に入る)、四五は秋で、間の四四は雜(述懐)とも秋ともとれるから前後いずれと一続きかは今までの規準だけでは決めがたいけれども、四四が前後どちらかの歌とは元来統一していなかったことは、この規準から明らかである。

ニ、現存本文の錯乱は祖本の錯簡とそれに加えて脱落に由来すると考えられ、かつそうした事態を生じて錯乱の原因を作った本は、一面九行の冊子本であったと考えられる。

前半は直観的に明らかで、説明不要であろう。現存本文の錯乱の状況から見ても、それは祖本の錯簡(あるいはそれに加えて欠脱もあると思われることは前述)といった機械的な原因に由来すると考えざるを得ない。

後半すなわちその段階の本が一面九行の冊子本であったことについては、若干の説明を付しておく。

イハの規準や前項の(一)(二)によって現存本文の問題箇所(元来は統一していなかったと考えられる箇所)を拾い出した上、その間の部分には錯乱欠脱がないと見られるものについて前後の問題箇所までの行数を数えてみると、次のような注目すべき結果が得られる。但し行数の計算に当っては、現存本と同じく、作者標記・題・歌は各一行、詞書はほぼ現存本の行数で数えた。

二四三歌——二五〇歌 一八行

二五一題——二五七の次 一八行

二五六詞——二七〇歌 一八行

二六八詞——二六六歌 三六行

二六七題——二九三の次 一八行

二四二歌——二五五の次 三六行(二四二については前項(一)にふれた)

三五題——三五歌 一八行

三六題——三七の次 一八行

すなわち、前項の(一)と(四)（特に(一)と(三)）や本項のイ／＼に照らして知られる現存本文の錯乱は、その移動の明らかな部分を見ると、常に一八行またはその二倍の三六行を一続きとしている。と言うことは、錯簡・脱落を起した段階の本が、一八行を一つの単位としていたことを示している。

一八行を一単位とする写本として考えられるのは、一紙一八行の卷子本か一面九行の冊子本かであろう。ところで、中世の歌集、特にそれが原本的なものであった場合には、卷子本も考えられないことはない（文献に見る勅撰集の例やかつて『群書解題』に言及した「統門葉集」醍醐寺本の例など）が、本集の場合錯乱の直接の原因となった本が卷子本であったという根拠はない（無論その反対の根拠もない）上に、卷子本では毎紙常に同一行数（しかも紙の継目にかかった行はなかったと考えねばなるまい）ということもやや考えにくいので、そうした事態は考えないでよいのではあるまいか。そうなると冊子本ということになるが、その場合一面一八行ということとは考えられず、一面九行と推測され（そのことは巻九・十の冒頭などで補強される）、それは中近世における歌集書写の方式として、きわめて普通のことである。かくて、現存本文の錯乱は、一面九行の本がある段階で生じた錯簡と欠脱に由来すると考えられ、その本の装訂が列帖であったか袋綴であったかはなお検討を要するけれども（末尾器書三の状況からは列帖の可能性が高い）、この規準ニを用いると、現存本文の錯乱を復元する際にイ／＼ハだけでは処理できなかった部分をもう処理することができる。

例えば、前項(二)で例5として示した三五の次の部分、「秋の哥に」と「浦月をよめる」との間が切れることは、そこに述べた通りであるが、どこから「秋の哥に」までが一続きなのかと言うと、二三の歌からなのである。その間は一度一八行であってその間には切れ目と見られる箇所がない上、三九の前に「資円法師二首」とあるのが三九・三〇の二首

を指すと考えて何の支障もないからである。あるいはまた、卷十の冒頭に見える式乾門院御匣の歌は二四一からどこまでかと言うと、この巻の端作りから数えて九行目の二四四歌までであって、一壺とその詞書は二四六と一続きで、某法師のものと考えられる。そのことは、実は規準へから一応推測されるところであった。式乾門院御匣が二十二首も入っているとすれば春夏計四首の後に雑（釈教）が来るのは早すぎるからである。事実、口の規準によって三六以下に式乾門院御匣の歌が発見され、前項(一)で例4として示した二四四の次と三五の詞書との間の切れ目に着目すると、三五の詞書「夏哥中に」は二四四から直ちに続くべきものと考えられる。そして今度は今の規準によって、そこから一八行後の三五歌まで十一首が一続きに御匣の歌と推定され(三五と三六との間の切れ目は、三五の次の行から逆に一八行数えてきても知ることができ)、彼女の歌は現存本で十五首が確認される(言いかえれば七首は確認されない)わけである。因みに、二六から三五の次行までは規準口によって尚侍家中納言(典侍親子朝臣)のものと考えられるが、この作者名が現存本の標記に見えないことから、現存本には欠脱のあることが知られる。

ホ、その他、前項の(四)をも念頭に置き、必要に応じて常識的・合理的な推測を行う。

これについては、特に断るまでもあるまいが、ただ前項の(四)から出る問題にふれておくと、原形における卷八・九両巻の構成と区分については必ずしも確言できないけれども、卷八・九両巻の各首尾の部分は原形を止めていると仮定すれば、卷八は僧位僧官を有する僧を(恐らく僧正―法印―僧都―法眼―律師―法橋の順に)、卷九は上人および法師すなわちいわゆる凡僧を、そして卷十は女子を、それぞれ収めていたと推測してよいのではあるまいか。更に凡僧や女子の配列にもある程度の規準があったかと思われるが、それを大凡推測した一斑は、後掲復元私案によって察せられるたい。

3、復元推測の実際

今回は、以上のような仮定・規準によって、できる限りの復元推測を試みた。その推測は、後掲翻刻本文の切れ目ごとに角括弧に入れて注した上、末尾には私案を一覧表形式で示した。本文の翻刻中、角括弧内の注記の文末に「…カ」と「カ」の字を添えたのは推定に多少とも根拠が不足であることを、「カ」の字を付さず断定したのは推定が相当に客観的と考えられることを示す。

錯乱の多い現存本を翻刻するに当っては、能う限り錯乱を訂正復元して示した方がよいとの意見もあろうが、以上の所説からも推測されるであろうように、恐らくは現存本が欠脱を有するためであろうが、その復元も完全にはできないので、今は現存二本の中で未翻刻の島原松平文庫本（尤も、前述のように現存二本は互にきわめて近い関係にある）の姿をできるだけ忠実に伝えることに、一つの主眼を置いた。

翻刻に際して取った具体的な方針は、一般の慣習と違わないつもりであるが、末尾に付したものを含めて要点を順不同に箇条書で示せば、左の如くである。

一、本文は、原則として底本（島原松平文庫本）を忠実に翻刻した。すなわち、改行や漢字仮名の別、仮名遣・送仮名等は底本の通りであるが、変体仮名は通常の平仮名に改めた。漢字の字体はなるべく底本のままとしたが、若干当用字体等に改めたものがある。

二、歌頭に、現存本の配列に従って一連番号を付したが、これは前述の水沢利忠氏がかつて付されたものと同一であ

る。

三、底本の誤脱と見られる部分で大倉山本（略称「大本」）その他によって訂し得るものは訂正したが、それについては必ず下段に断った。

四、下段には、全体にわたって大倉山本との校異と他の歌集・歌書への入集・採録状況ならびにそこに見える語句との異同を注した。その際、勅撰集入集歌に付したのは国歌大観番号、「万代集」についても筆者が付した一連番号であるが、「夫木抄」の場合は国書刊行会本の頁数である。

五、底本各丁の表・裏の終をそれぞれ「と」で示し、丁数を付した。

六、右に述べたような考察によって、本文に元来切れ目があったと推定されもしくはその可能性のある部分には○印を挿入し、その前後に角括弧に入れて錯乱復元の推定・推測を記した。その場合、右にも述べた通り「……へ続ク」等とあるのは筆者として断定的な推定を、「……へ続クカ」等とあるのは必ずしも断定できない推測を意味する。

七、各作者名と入集歌数の標記の下に、その入集歌の歌番号を、筆者の推定・推測に基き、角括弧に入れて示した。

八、末尾に、現存部分の復元私案の骨子と初二句および作者の索引とを付したが、それらの凡例的事項はそれぞれの冒頭に記した。

（追記） 校正に際して二十五年ぶりに大倉精神文化研究所を訪ね、職員山野氏のお話を伺っているうちに、大倉山本は榊原家旧蔵本（榊原忠次旧蔵書）であったことに気づいた。同研究所は昭和初年に榊原忠次旧蔵和書をかなり入れた由であり、この「人家集」には例の蔵書印はないけれども、本の外見と島原松平本との密接な関係とから、これも榊原忠次旧蔵本に違いないと思われるのである。

人家和詞集卷第八

前大僧正公蒙九首(二一七)

前左大臣家の十首哥に帰鷹

一 かりかねは秋と契て帰らん老のいのちをいかゝたのまむ

郭公を

二 老かよにかたらひつくせ郭公ふるき昔をしのひねならば

螢

三 あつめをく窓の螢よ今よりは衣の玉のひかりともなれ

閑居秋風

四 宮こ人とはぬ恨みも今さらに身にしむ許秋風そ吹

『一ウ

閑九月盡

五 此秋は日かすをそへてなか月の今日を再ひ惜みつる哉

題不知

六 なかくにぬるかうちにやみすもあらむうつゝの夢はさむるよもなし

曉夢

七 よはり行老のねさめの暁はみるとしもなき夢そはかなき

懐旧

一―続拾遺雜春四六、帰雁を、天台座主公蒙。  
一か―底本「干(草体)」ヲ見セ消チトシ、「か」  
(可)ト改ム。云1参照。2らん―続拾遺「と  
も」

三―続拾遺釈教三五、五百弟子品、天台座主公蒙。

五―か―底本「リ」ヲ見セ消チトシ、「か」(可)  
ト改ム。

八 なゝそちにあまりうき身のこしかたを思ひいつるもひとむかし哉

身のゝそみなひてかしまり申侍けるついでに

九 かく許うきこときかぬみよなれはいほの中にする人もなし」二オ

前大僧正道慶二首〔一〇一〕

暁時雨といふことを

一〇 あか月の嵐やかはるまきのやにおなし時雨のをとそさひしき

なか月のころは<sup>1</sup>つせに詣ける時三輪山のほとりにて

二 おしねほすみわの山田にかりなきて夕日時雨るゝ杉の村立

前大僧正隆弁十七首〔三二一〕

暮春を

三 老か身はいつもことしと思ひしにむそちの春を猶惜哉

郭公

三三 みやまには我をかたらん時鳥またこしにすむ人しなけれは』

二ウ

三四 もろともに物や思ふとゝふへきになきて過ぬる郭公かな

〔字高マ、〕  
中務卿親王家百首に

三五 すきにける年は六そちの秋をへてをきそふ露は老の涙か

月を

一六 月かけもふけやしぬらむからさきの松吹風のをとのすめるは

六<sup>1</sup>侍—底本右傍補入。2は—底本「や」ヲ見セ消チトシ、「は」ト改ム。

二—新統古今秋下三三、題しらず、前大僧正道慶。万代秋下二六、同、拾遺風体秋、田家、大僧正道慶。1は—底本「い」ヲ見セ消チトシ、「は」(者)ト改ム。2杉—底本「梧」ヲ見セ消チニテ「杉」(木篇二八)ト改ム。

三1か—底本「り」ヲ見セ消チトシ、「か」(可)ト改ム。

三五1六—底本判読シガタキ草体ヲ見セ消チトシ、楷書ニ改ム。

題不知

一七 いつくにもあとをほとめし白雪のふるにまかせて過る身なれば

旅哥1に

一七 続後拾遺雜上二〇四、題しらず、前大僧正隆弁。

一八 まつら舟とまりや近く成ぬらむなみちの末に雲のかゝれる

一八 一旅一底本「櫻」ノ如キ字（手篇ニ哀）ヲ見セ消チトシ、「旅」ト改ム。四六一参照。

一九 みちのくのまかきの嶋の松1ともいかて都の人に語らん 一三オ

述懐

一九 一を一大本「に」（耳）。

二〇 をのつからさそひし水も絶はてゝ身をうき草のよるかたを1なき

二〇 一を一アルイハ「そ」ノ誤写カ。

二一 むはたまのはかなき夢ときかすとも誰からのよをうつゝとはみむ

六帖題哥中にふね

二二 昔みし人もなきさによる舟の我許こそ朽のころらめ

はらからあまたみまかりぬる事を思ひて

二三 しけかりし草のゆかりもかれはてゝひとり末葉に残る白露

文永八年熊野にまうて侍けるにあまのかは

のほとりをとをり侍とておとこやまはるかに

みえ侍ければ

三ウ

二四 こゝにては雲ぬに見えておとこ山あまの川こそ麓成けり2

すみよしにまうてゝ

二五 この世をはいとひはてたる老かみに猶すみよしと思ける哉

云一夫木二十山言、前大僧正隆弁、左注、上ノ詞書ニ酷似。1か一底本「千」(草体)ヲ見セ消チトシ、「か」(可)ト改ム。一1参照。2けり一夫木「けれ」。

みかみの山にて南海雲はれて月くまなく侍ければ

三 波とをき南のうみは雲晴てみかみの山にすめる月かけ<sup>1</sup>

あさくまの宮にまうて、月をみて

三 神代より光をとめてあさくまのかゝみの宮にすめる月かけ

本覚のこゝろを

三 このほかにさとりはなしとさとるこそ心をしれる心なりけれ

前大僧正道勝三首〔三三〕

一四オ

題不知

三 身にしめてみるも思へはあはれなり月にいかなる契有けん

藤尾草庵にて

三 ふか草をほかには問しこの里も秋かせふけは鶉なくなり

述懐哥に

三 思ふこと色には出し中くによに随てよをはすくさん

前大僧正澄覚十五首〔三三〕、他六首散佚カ)

百首哥の中に

三 吉野山桜にましる峯の松をのれさかてもはるや知らん

花を

一四ウ

三 何事もかはりはてたるいにしへのなけきや花に猶残らん

三―夫木二十三海三、みかみ山にて南海はれて月隈なく見えければ、南の海百首歌合、前大僧正隆弁。1め―底本・大本「す」、夫木抄ニヨリ改ム。

三―統拾遺神祇二五、神祇の歌の中に、前大僧正隆弁。

三―ま―大本「さ」(底本「万」の草体)。

三―澄覚法親王集春、花

落花

誰ゆへにあくかれそめし山ちとて我をはよそに花のちるらん

三六―統拾遺春下二六、山路落花、澄覚法親王。現存卅六人詩歌丙帖、同、座主宮。

秋哥に

何となくなかむればけにうかりけりいひならはせる秋の夕くれ

心からなかめてものを思ふ哉我ためにうき秋の空かは

この秋もさすか命のなからへておなしうき身に月をみるかな

三六―統拾遺秋上三六、秋の歌の中に、澄覚法親王。  
三六―澄覚法親王集雜、月前述懐。

月前鹿

おいぬれはねられぬまゝに月をみて夜深き鹿をひとり聞哉

三六―澄覚法親王集秋、月前鹿。

百首哥の中に

―五オ

このころはをきのは風にねさめしてむなしく秋の夜をのこす哉

三六―澄覚法親王集秋、秋歌中に。

吹かせのいつも身にしむをと羽山松には秋やときは成らん

四〇―雲葉秋下、秋歌に、前権僧正澄覚。

〔以下欠脱ヲ挟ンデ一三三へ続クカ〕

○

〔三二一カラ続ク〕

権律師円勇十五首〔四一―五〕

梅をよめる

をらてこそ人にもみせめ鶯のなきてうつろふやとの梅かゑ<sup>1</sup>

四一―五―大本「え」。

〔字高マ〕  
光俊朝臣よませはへりける百首の

春の哥

三 かすみつゝわたる日かけも長閑にて夕くれとをきはるの空哉

郭公を

四 時鳥秋の心はまたしらし何のうれへにねをはなくらむ

『五ウ

五月雨

四 あすからは月日のゆへは見えねともなかれて早き五月雨の比

題不知

四 時わかぬこけの衣のいかなれば袖のみ秋の露をみすらん

残月

四 またれつる夕の空にかはらぬは松の雨なる山のはの月

歳暮

四 くるとみてあるへき物を年月のうたて我身につもりぬる哉

(宇高マ)

中務卿親王家当座哥合に夏待恋

四 夕たちはくるゝたよりに成ぬともくもるに付て人やこさらん」六オ

恋の哥中に

四 さても猶かきりあるよの契りとてうきにまけぬは命なりけり

百首哥に

五 行さきにこゆへき山はみえわかれて霞にうかふはるのたひ人

四 兎 統拾遺恋五・一〇三、恋の歌の中に、権少僧  
都門勇。

六帖題哥の中に村雨

五 うちき雲のとたえてかゝるをのへより夕日にみえて村雨そふる

述懐の心を

五 ながらへて物や思はんさきのよのむくひの程のあらんかきりは

五 いてかたきよをうくひすの谷のとに残てなくや我み成らん

廿八品哥中に随喜品<sup>2</sup>

『六ウ

五 人つてにきゝわたりても吉野山あたには花を思ひやはする

陀羅尼品十羅刹女

五 ゆきかへる雲のかよひちとをくともおとめのすかた身をははなれし

権律師聖勝一首〔五〕

同法衆をむすひてさきたつをはとふらふわさ<sup>1</sup>

し侍けるによめる

五 いけるよは有にもあらぬ身なれともなき人かすにいつかとはれん

権律師円範二首〔五、五〕

題不知

五 はつせ山こすゑにあまる花の色に霞そ薄きはるのあけほの「七オ

恋の哥に

五 いつまでのなさけ成けんいつはりのことのはさへそ今は恋しき

五1え―底本「み」(ミ)ヲ見セ消チトシ、「え」ト改ム。三1参照。2かゝ―底本「よゝ」、大本ニヨリ改ム。三1参照。

五1廿八品―底本「廿八思」(草体)ヲ見セ消チトシ、「廿八品」(行書)ト改ム。2品―思(草体)ヲ見セ消チトシ、「品」(行書)ト改ム。

五1さ―底本「き」ヲ見セ消チトシ、「さ」ト改ム。

五―続拾遺恋五・三三題しらず、権律師円範。

権律師良性二首〔六〇〕

郭公

五 しのひねもなかくてそすぎむ郭公卯花さかぬ壙ねなりせは

師匠身まかりてのちかの墓前にて経<sup>2</sup>よみ侍とて

六 露のみをいかなる風のさそひけ<sup>3</sup>むあはれはかなき草の原哉

権律師兼濟一首〔六一〕

述懐哥に

六 しなはやと思ふ心になはぬやうきをもしらぬ命なるらん<sup>2</sup>

権律師守円二首〔三三〕

題不知

三 そことたにしられて過る別哉いつくかはるのとまり成らん

秋夕

三 いつとでも露けき袖はあやし<sup>1</sup>とも思ひそわかぬ秋の夕くれ

権律師定勝三首〔三六〕

秋哥に

三 色かはるを野のはき原露をちて涙かすそふはつ鴈のこゑ

時雨

三 ときは山峯のうき雲いくかへり染ぬ梢の猶<sup>1</sup>しくるらん

「八オ

六〇 1 底本「さ」(佐)ヲ見セ消チトシ、「ま」ト改ム。2 経「底本」ノ如キ字ヲ見セ消チトシ、「経」(草体)ト改ム。3 け「底本」ヲ見セ消チトシ、「け」ト改ム。

六一 1 統門葉雜下、題しらず、権律師兼濟。1 かなは「統門葉」まかせ。2 命「底本」さ「ヲ見セ消チトシ」。「る」(留)ト改ム。

三三 1 底本「折」(草体)ヲ見セ消チトシ、「し」ト改ム。三三 2 三三 1 参照。

三六 1 猶「底本」於「(草体)ヲ見セ消チトシ」猶「(草体)ト改ム」。

題不知

突 今日までは何なからへて露のみのうきにはきえぬ命なるらん<sup>1</sup>

突1ー 底本・大本、字体「か」(可)ニ近シ。

権律師全家三首〔卷一六〕

春修行にいてんとしけるに花を見て

空 あかすみる心を花にとゝめおきてわれにもあらず急くたひ哉<sup>1</sup>

空1急1底本「忘」ノ如キ字ヲ書キ(総ノ旁トハ読メズ)右ニ「急」ト書ク。一五1参照。

春曙を<sup>1</sup>

突1春1底本「松」(篇ヲ上ニ置ク字ノ草体)ヲ見セ消チトシ、「春」(草体)ト改ム。

突 なかめてもたゝわれからのつらさにてかこつかたなき春の曙

百首哥中に

突 みこしちやはるかにみればあらし山雲とひとつに積る白雪

権律師隆範<sup>1</sup>〔七〇〕

』八ウ

突ノ次1ー「二首」トアルベキカ。

述懐のこゝろを

古 さすか又こゝろに物をわけはこそうきをりふしのねもなかるらめ<sup>1</sup>

古1こゝろ1底本「ころ」(一統キノ字)トシ、「こ」ノ部分ヲ見セ消チニテ「こと」ト改ム。

法橋弁全二首〔七一七〕

春哥中に

古 これも又むくひ有てや散花に身をもかへむと思ひそめけん

題不知

古 はかなしといふ許にてそむかぬや心とかかのうきよなるらん<sup>1</sup>

古1か1底本「り」(里)ヲ見セ消チトシ、「か」(可)ト改ム。

〔三行余白〕

』九オ

人家和詠集卷第九

円空上人二首〔三三〇、三三一〕

春のころみまかりにける人のゝちのわさして

よみ侍ける

三三〇 はる山の煙となしてみし人のおもかけさらすたつ霞哉

在世菩提滅後凡夫同被照撰取光明の心を

三三一 くもり行人の心のすゑのよを昔のままにてらす月かけ

禅空上人五首〔三三二、三三三、三三四、三三五、三三六〕

秋哥に

〔以下三三二続ク〕

○

〔三三四ノ次カラ続クカ〕

三三四 月に猶のこるあはれも有けりと思ひしらすのおきのうはかせ』九ウ

雪

三三五 みち絶て人も問はれはうしと思ふものからみつる庭の白雪

任弁法師一首〔三七七〕

初冬時雨といふことを

三三一統拾遺釈教三三六、在世菩提滅後凡夫……  
(以下同上) 円空上人。

三三六「ね」ノ誤カ。

七 けさよりは秋をへたてゝいこま山よそになかめし雲そしくるゝ

仲恵法師三首〔七〇〇〕

浦月をよめる

七 霧はるゝあかしの浦の秋かせにしまかくれまで月そさやけき

父藤原仲敏みさかりてのち昔にもかはらす

申へきよしなと申ける人の返事に

「一〇オ

七 ことのはの露のなさけのかゝるとも草のかけにはしらすやあるらん

題不知

八 あはれけにうきよの夢をいくたひかなかき眠のうちのみつらん

良位法師二首〔八〇一〕

百首哥中に

八 人の上によそへてそみる女郎花たゝ一時の花のちきりを

述懐

八 さめてよのかすならぬ身はそむかすやすてはやとたに身こそいはれね

良和法師二首〔八〇二〕

夏哥に

『一〇ウ

八 今はゝや時すぎぬらし郭公いつか聞しと人のとふまで

〔宇高マ〕  
平等性智を

七1さ―底本・大本「さ」(佐)ナレド、「ま」フ誤写カ。七1参照。2に―底本右傍補入。

六四 さとり入み山かくれの草木まで心の外の種やなすらん

良心法師二首〔六五〜六六〕

旅行の心を

六五 すみわふる身は中／＼にたひにてそしはし立よるやとも有ける

題不知

六六 いらかたきまことの道のせきもりはやかて我みの心なりけり

順真法師三首〔六七〜六九〕

落花をよめる

「一一オ

六七 山にても猶うき時のなくさめと思ふ桜のいつちゝるらん

暁郭公

六八 夜をかさねゝさめの空の郭公老のしるしのはつねをそ聞

後朝恋

六九 暁のとりのはつねにわかれきて夜ふかき月をひとりみるかな

〔以下続キ未考〕

○

〔七四ノ次カラ続ク〕

七〇 あか月の枕になるゝきり／＼す涙の下にねおやなくらん

七一 ふけぬとも思はてよはのあけぬるは月に心やうつりはつらん

七二 おー「を」ノ誤カ。

〔宇高マ〕  
道親上人身まかりてのちかのふるきあと  
にてよみ侍ける

六三 うゑをきし<sup>2</sup>やとの松こそふりにけり昔のぬしやとをさかるらん 一一ウ

寶池蓮花を

六三 我をまつ池の蓮におく露や心のかよふ涙なるらん

下輩観

六四 とりのねになかきねふりのさめぬればやかて有曙の月をみる哉

心海上人六首〔六五〜100〕

深山郭公を

六五 おなしくは我をかたらへ郭公山深くすむ思ひてにせん

もろこしにわたりける時日本の山もみなみえす<sup>1</sup>

なり侍にければ

六六 けさは又山のはもなく成はてゝ波のうへにそ雲もかゝれる 一二オ

弟子にて侍りける法師の外にまかり侍て

みとせへてかへりすむへきよしいひおくりて

侍りければ

六七 さのみ又身のうき度にすみかへはとまりはつへきやとやなからん

述懐哥中に

六三 1 親「観」ノ誤写カ。2 し「底本」新「草  
体、判読シガタシ」ヲ見セ消チトシ、再ビ「新」  
(草体)トス。三 1 参照。三 1 参照。

六五 1 深「底本」「三水ニ榮」ヲ見セ消チトシ、  
「深」(草体)ト改ム。

六六 1 底本「と」ヲ見セ消チトシ、「み」ト  
改ム。

六 命をはいか成人の惜らうきにはいける身こそつらけれ

金剛般若経の不應取法不應取非法の心を

九 いかにも惜めとあたにちる花のとまらぬ色にとまるころを

過去心<sup>1</sup>不可得<sup>2</sup>現在心<sup>2</sup>可得<sup>3</sup>未来心<sup>3</sup>不可得

一〇 水のおもにやとれる月のかけを見てみよの佛の心をそしる』 一一ウ

円嘉法師四首〔二〇一～二〇四〕

百首哥中に花

二〇 おいぬれは身こそかなはね心をは花みる人にたくへてそやる

雨後月

二〇一 あたらよの雨のうちこそふけにけるいりかたはるゝ山のはの月

月哥中に

二〇二 老ぬれは月に心もなくさます今いく秋とねのみなかれて

別の心を

二〇三 なをさりにかへらん程を契哉命はしらぬ別なれとも

勝秀法師三首〔二〇五～二〇七〕

正嘉二年三月高野山に御幸のおりふし

はなのさかりに侍けれは

二〇五 宮こ人みはやす山の桜花今日こそ物はおもはさるらめ

六 一 新後撰雑中二四四、題しらず、心海上人。

二〇〇 一 心 底本「以」(草体)ヲ見セ消チトシ、「心」ト改ム。2 可 上二「不」脱カ。3 来 一 底本「朱」ヲ見セ消チトシ、「来」ト改ム。

二〇一 新和歌秋、題しらず、円智法師。

二〇三 続千載羈旅志、別の心を、円嘉法師。

二〇五 一 底本「は」(波)ヲ見セ消チニテ「は」(者)ト改ム。

修行し侍けるときいなやの別所といふ所

そしはし立よりて侍けるをあるしの僧とゝ

めける返事に

二〇一そー「に」（其）ノ誤写カ。

二〇二 こゝも猶うきよの中のやとなれはいなや心もとまらさりけり

同法身まかりけるをおくり侍て

二〇三 問れんと思ひし人はさきたちぬわか山ちをは誰かおくらん

心円法師九首「二〇六、二〇七」

『一三ウ』

百首哥中に

二〇四 みるまゝに桜そしるきおのへ成雲とは人のそらめ成けり

月前花を

二〇四らー底本「」ヲ見セ消チトシ、「ら」ト改ム。

二〇五 老ぬれは思ふもかなしあたらよの月と花とをいつまでかみん

初秋

二〇六 吹風の身にしむまてはなけれともけしき秋なる夕暮の空

暮秋雨

二〇七 けふは又誰をたのめていそのかみふるにも雨と秋の行らん

寄衣恋

二〇八 うき人のかたみとみるもはかなきは身をかへてける蟬の羽衣」一四オ

百首哥中に

- 二三 ひとりねをいかにせよとて恋衣ころもよさむに成まさるらん  
 二四 待事のものにもかくにもあらはこそなからへはやと身をも思はめ  
 二五 さすかよもかくてはとこそ思しにかなはて早く身を老にける  
 題不知

二六 なをいとふ山のおくにもすまれぬは誰身<sup>2</sup>にそへる心なるらん  
 導世法師二首〔二七〇二〇〕

海邊月を

二七 いはかねに玉もかきしき住吉のあさかの浦の月をみるかな

懐旧<sup>1</sup>

二八 わすられぬ昔なりけりうしと見し事をあまたに思ひいてゝも

志遠法師十首〔二九〇三〇〕

春哥中に

- 二九 さく花のつゐの別はさもあれやこれはあるよに帰鷹かね  
 三〇 よそに見る心のせめてあかなくにたふさにけかす山桜哉

郭公を

三一 時鳥さしもや待んきかてこそこの秋より今日までもあれ

五月雨

三二 瀧のうへに又たきつせのをとす也みふねの山の五月雨の比

『一四ウ

二四―続拾遺雜中三三、題しらず、心円法師。  
 1か―底本「か」(関)ヲ見セ消チニテ「か」  
 (加)ト改ム。  
 二五1―底本「ろ」ヲ見セ消チトシ、「そ」ト  
 改ム。

二六―新後撰雜中三三六、題しらず、心円法師。  
 1は―新後撰「や」2誰―新後撰「我」。

二七―玉―底本「玉」(草体)ヲ見セ消チトシ、  
 「玉」(楷書)トス。  
 二八1―底本「旧」(正字ノ草体)ヲ見セ消チ  
 トシ、「旧」(正字ノ行書)トス。

竹雪

「一五オ

二三 ふる雪をばらはしとこそ思へともなきはの竹のをれぬへければ  
恋哥中に

二四 しはしこそ忍ひあへしか恋しさの外に人めはおほえさりけり

二五 おのつからまちえたる夜はもろともにかにといひてことのはもなし

もろこしにとしひさしくありて帰朝して月を見て

二六 古里のおもかけそひて<sup>2</sup>みし月は又もろこしのかたみ成けり

述懐

二七 ゆくすゑを思ふにいたくこほる<sup>1</sup>はうきみのはてや涙成らん

題不知

二八 あくかれて立帰るにそ思ひし心のしらぬ心ありとは 「一五ウ

資円法師二首〔二元〕三〇〕

藤原信實朝臣身まかりて後周忌の日新院

弁内侍のもとにつかはしける

二九 猶もまたつきせし物をかなしさはけふにはてぬと思なすとも

尺教を

三〇 やはらくる光はちりにましるとももとのさとり月はくもらし<sup>1</sup>

〔以下続キ未考〕

三六―新後撰撰旅六五、帰朝の後月を見て唐土の事を思ひ出で、よみ侍りける、志遠上人。1古  
―底本「旧（正字ノ草体）」ヲ見セ消テトシ、  
ト改ム。2て―新後撰「し」。3みし月は―新  
後撰「よるの月」。

二七1、―大本「ら」（字形ヤヤ不分明）。

三〇1も―底本「こ」ヲ見セ消テトシ、「も」ト  
改ム。

〔僧正某一首以上〕〔三三〕〔四〇〕カラ欠脱ヲ挟ンデ続クカ〕

二三 たきつせに三とせしほれしこけ衣いくよをふとも神な忘そ

権僧正定濟三首〔三三〕三三〕

風前惜落花といふことを

二三 かきりあれはさらても今は散花をいかにせよとて山をろしかせ〕一六オ

月催涙

二三〕統門葉春下、百首歌よみける中に、前大僧正定濟

二三 秋のよのかたふく月のかけみれはあはれ涙を袖にこほるゝ

無常の心を

二三 はかなしな野はらの草の末の露風まつ程の人のあはれは

前権僧正道玄八首〔三三〕三六〕三三〕三三〕

名所花を

二三 見すしらぬよゝの昔も忍はれてあはれと思ふしかのはなその

郭公

三三〕統拾遺雜春の卷、おなじ〔故郷花といふ〕心き、前大僧正道玄。

二三 ほかよりも我やとになけ時鳥かゝる涙は誰かゝすへき

螢

』一六ウ

三三〕か〕底本「よ」ヲ見セ消チトシ、「か」ト改ム。五一〕参照。

二三 山里のまるとに螢をあつめてもくらき心は猶やまよはん

山早秋

一三 白露もおきこそあへねうちなひく<sup>1</sup>みさかの山の秋の朝かせ

<sup>1</sup>三六「みさ」底本「き」ヲ見セ消チトシ、「みさ」ト改ム。大本「くさ」。

秋の哥に

〔以下三四へ続ク〕

○

〔アルイハ二五三ノ次カラ続クカ〕

浦月をよめる

一四 秋のよの月にはつらき煙とも猶こりすまのあまそ塩やく

道妙法師一首〔二四〇〕

恋哥中に

一四 わすれしの契りはかりをかことにてさすかにたのむくれそはかなき

〔一行余白〕

〔一七オ

人家和歌集卷十<sup>1</sup>

<sup>1</sup>十一上三「第」脱カ。

式乾門院御匣廿二首〔二四二〕二四四・二四五ノ三五、他七首散佚カ〕

春哥の中に

一四 氷せし山のたきつせおとたて、玉ちる程に春風そ吹

百首哥に

一四 袖ぬるゝ野さはのわかな今日そ摘昔の春のわすれかたみに

郭公を

一四 郭公きなかぬよをや恨みまし身を卯の花のかきねならずは

一四 五月雨と物思ふ空の郭公おなし心になかぬ夜そなき

〔以下三五へ続く〕

○

〔某法師一首以上〕〔一四〕〔以下続キ未考〕

金剛般若経中に法当應捨何況非法

『一七ウ

一四 身のうさのあはれなくさむ月をたにつもれば老と猶いとふかな

静範法師六首〔一四一〕〔五一〕

初郭公を

一四 ひとこゑに思ひそすつる郭公またれし程のうさもつらさも

歳暮の哥として

一四 よの中の人かすならてすくすみをすてゝもゆかぬ年の暮哉

恋の哥中に

一四 あはすはと思ひしるとも玉の緒1のなとなからへて恋しかるらん

述懐

一四 まつことの今1ゆくすゑにありとてもたゝさはかりの夢のよの中」一八オ

一四一ツム(ルビ)―大本ナシ。

一四一況―底本「本院」、今改ム。三六一参照。  
2は「底本」(留)ヲ見セ消チトシ「は」(者)ト改ム。

一四一緒―底本「尾」ヲ見セ消チニテトシ「緒」ト改ム。

一四一今―底本「入よ」(字形不分明)ヲ見セ消チトシ「今」ト改ム。

土御門院小宰相秋ころ身まかり侍ける後

十月はかりかのすみなれたりける山さとにま<sup>2</sup>  
かりけるにしくれし侍りければ

一五 露きえし秋より袖のしほれきてまた時雨そふ神無月かな

過去帳よむを聞て

一五 いつまてか我身のよそのあはれとてなきかゝすそふ名をも聞へき

源勝法師一首

〔以下統キ未考〕

○

〔後鳥羽院二条五首以上〕〔一五〕一五〇〔三五〕カラ欠脱ヲ挟ンデ統クカ〕

一五 墨染の袖の水も解やらすうき身の春そつれなかりける

一五 水無瀬山昔の春の色なから我みそ今は花のよそなる

五月雨を

』 一八ウ

一五 住なれしあまのとまやは朽ぬらん主なき跡の五月雨の此

歳暮

一五 墓なしや夢のうちにてすすよをうつゝと急<sup>1</sup>くとしのくれ哉

題不知

一五 忘れすよ秋の浦風浪わけて八十嶋出しおきの<sup>1</sup>にしまを

「吾」→「ま」底本「さ」ヲ見セ消チトシ、「ま」  
（万）ト改ム。2「ま」底本「さ」（色）ヲ見セ  
消チトシ「ま」ト改ム。3「ま」底本「さ」  
ヲ見セ消チトシ「ま」ト改ム。満ト改ム。

一五 夫木四花六、春歌中、人家、後鳥羽院二  
条。1春夫木花。2花夫木春。

一五 急底本「総ノ旁」ノ如キ字ヲ書キ、右ニ  
「急」ト書ク。七参考。

一五 一に「小」ノ誤写カ。

安嘉門院高倉三首〔一五〇～一五二〕

寶治二年奉りける百首に寄枕恋

一五〇 ひとりのみかた敷袖の手枕によかれぬ物は涙なりけり

恋哥中に

一五一 夢にたにかよはぬなかの忍ふ山心のおくを誰にとはまし 一九〇

一五二 恋わふるわかまつ山は空しくていかなるかたに浪のこゆるん

今出川院近衛十三首〔一五三～一六二、他十一首散佚カ〕

春哥中に

一五三 かく許すみうきよにもはるの月くもりはてぬやなさけなるらん

一五四 色に出ていはぬもしるき思ひかなたかしたそめの山吹の花

〔以下欠脱カ〕

○

〔典侍親子朝臣二十八首カ〕〔一五五～一七〇・一七二・一七三・一七五・一七六〕〔コノ前欠脱〕

一五五 心あてに春や知らん今日とても猶ふる雪そ鶯のなく

春哥に

一五六 あかさりし袖かとはふ梅のかに思ひなくさむ暁の空

中務卿親王家の百首哥に

一五七 帰かりわかれをうしと思はずはありもすらめとねをそなくなる 一九ウ

一五〇―新千載恋一・二五、宝治の百首の歌に寄枕恋、安嘉門院高倉。宝治百首恋、寄枕恋同。新時代不同歌台下四十七番右、同。1カ―底本末(倉体)ヲ見セ消チトシ、1カ―ト改ム。

一六一―新時代不同歌台下四十七番右、安嘉門院高倉。

一五三―底本「は」ヲ見セ消チトシ、「な」(奈)ト改ム。2―底本「く」ヲ見セ消チトシ、「し」ト改ム。

一五五―「に」(耳)ノ誤写カ。一九一参照。

一五六―続拾遺恋四・九七、題しらず、典侍親子朝臣。1の―続拾遺「か」。

一五七―底本右傍補入。

前内大臣基家の百首哥合哥

一 空 吹風のめにみぬからにうつろふやしのひに花をさそふ成らん

題不知

一 突 人へのみつらさはみせて吹風のこゝろにかなふ山さくらかな

前関白左大臣家の百首夏哥

一 空 みあれとて神のまれくゆるすなりあふひもいさや契しらねは

一 穴 けふとてもあやめそわかぬ身のうきに人しれぬねは絶すなかれて

中務卿親王家の百首に

一 穴 みる程もみしかき夏の月かけはあくるよなからあくるしのゝめ

一 七 かきくらしふりつる物を夕立の跡たにみえぬ庭のうたかた」二〇オ

百首哥合に

一 七 あやしくもねをのみ忍ふ螢かなもゆとは人にみゆる物から

文永七年八月十五夜内裏五首哥秋曙

〔以下欠脱ヲ挾ンデニ六ニ続ク〕

○

〔以下続キ未考〕

全教法師一首〔七七〕

題不知

一六 建長八年百首歌合二百八十七番左、〔院中納言〕

一六―三十六人大歌合十七番左、院中納言、女房三十六人歌合十六番右、後醍醐院中納言典侍。一七―三十六人大歌合・女房三十六人歌合。二に―底本右傍補入。

一七 一に―底本右傍補入。

一七 一知―底本「智」、大本ニヨリ改ム。

一七 花は猶心もしらすはるのよの月そ昔のかけはかはらぬ

西田法師三首〔七三〇一七五〕

秋の哥中に

一七 花ちらす風をはまたし宮城野のもとあらのこ萩露をもくとも

題不知

『二〇ウ

一七 けさ見ればはらひかねたる嵐哉氷にけりな松の白雪

旅行

一七 こえはては里かと思ふ夕くれに猶山みえてかゝるしら雲

定宣法師二首〔七六〇一七〕

百首哥中に

一七 くれて後さきはしめける夕かほの花は夜のまや盛なるらん

題不知

一七 この里も月そ待るゝあつまち<sup>1</sup>や山こえなはとなに思ひけん

本蓮法師三首〔七六・二七・三六カ〕

百首哥に

「二一オ

一七 散花のなかるゝ川のせをはやみせかれぬ水に春そ暮行

〔以下アルイハ三七へ続クカ〕

○

一七三〇一西―底本「雨」ヲ見セ消テトシ、「西」ト改ム。

一七三〇一―底本「ち」(字形不分明)ヲ見セ消テ改ム。

〔三五ノ次カラ続ク〕

一五 さぎのよにいか結ひて人<sup>1</sup>つらく身をうらめしき契なるらん

一五<sup>1</sup>つ—底本「つ」（川）ヲ見セ消チニテ「つ」  
改ム。

一六 おほかたのなさはかりのことの葉に忘れぬみと猶たのむかな

寄風恋を

一七 とわれぬもさこそはあれと思ふよのつらさしらす風の音哉

北野社三首哥合に

一八 せきもりのいかなるひまの昔にて又もとをさぬ合坂の山

中務卿親王家百首に

一九 かく許わするゝことのやすからは人つてにてもおしゑ<sup>1</sup>やはせむ

一九<sup>1</sup>ゑ—底本右傍補入。

二〇 ちきらねとみ野のを山のひとつ松久き友と思ひやる哉 『二一ウ

内裏にて源氏のまきくを題にて哥よみ侍

けるにぎりつほ

二一 すみまざるいけの心にあらはれてもとのこた<sup>1</sup>ちのかけもみえけり

二一<sup>1</sup>こ—底本「ら」ヲ見セ消チトシ、「こ」ト  
改ム。

題不知

二二 身をさらぬうさを忘れてよの中にしられぬ山となにたつぬらん

二二—新時代不同歌合上廿二番右、中納言典侍。

室町院中納言二首（八七、他一首散佚カ）

式乾門院かくれさせ給て後日かすにつけてへ

たつる御事なと御匣のもとへ申つかはずとて

一八 それも猶おなし涙やかゝるらんこけのたもと露もかわかず

〔以下アルイハ云四ノ前へ続クカ〕

○

〔法印定円二十六首以上〕〔一八ノ「空・空」ノ「哭・元・三五」〕〔三六ノ次カラ欠脱ヲ挾ンデ続クカ〕

嶋花を

「二二オ

一八 波まかと思へは浪のかゝれるは見えし小嶋に花そさくらし

題不知

一九 山桜をくれてさける色みてもはやさきたちし春そ恋しき

七夕

一〇 七夕はあふ人からのななき夜をしらてや秋と契りそめけん

百首哥中に

二一 なかくにうきたる雲の一村はさてもみつへき月の空哉

二二 くれ竹のは山の霧のあけかたに猶よを籠て残る月かけ

龜山殿にて当座の三首哥に雨後月

二二―統拾遺秋下三、題しらず、法印定円。

二三 村雨の空はなこりもなければとも月にのこれるのきの玉水

「二二ウ

題不知

二四 なかむるに涙をつとはおほえねとあやしき袖の秋の夕くれ

二五 露さへと思ひし秋をおくりてもいとひかたく袖そしくるゝ

人家和歌集（福田）

夜氷

一六 さゆるよはたきつ心やよはるらん山下水も氷してけり

契恋

一七 さならてはたのめもおかしいつわりのあるよそ人のなさけ成ける

〔以下翌一へ続ク〕

○

〔以下続キ未考〕

恋哥中に

一八 つらさをはうき身のとかに思ふこそせめてもしたふ心成けれ

猷貞法師二首〔一九〇～二〇〇〕

「二三オ

大井川のほとりにまかりて哥よみ侍ける中に山を

一九 大井川あたりの山のなをとへは空にこたへてあらし吹也

恋哥中に

二〇 後のよと契らはなにと惜からむあふにはかへぬ命なりとも

寶遍法師二首〔二〇一～二〇二〕

二〇一と一アルイハ「か」ノ誤写カ。

秋野風を

二一 夕されはお野のしの原露ちりてあさち色つく秋風そふく

懐旧の心を

二二 旧一底本草体（正字）ヲ見セ消チニテ、

一七 新後撰恋三・九空、契恋、法印定門。1か  
ム。底本「リ」ヲ見セ消チトシ、「か」(可)ト改

二〇二 みしことはさなから夢の心ちして有し昔そうつゝともなき

玄覚法師四首〔三〇三、三〇四、三〇五、三〇六〕

『三三ウ

行書(同)ニ改ム。2し—大本ナシ。

夕花を

二〇三 ちらぬまのわかれやくるゝ空ならむみえす成ゆく花の色哉

題不知

二〇四 このねぬるあしたの庭の露けさも誰ゆへならぬ秋の初かせ

月前萩<sup>1</sup>

〔以下七五へ続クカ〕

○

〔四カラ続ク〕

夏哥中に

二〇五 すみ染の袖のよそ成あやめ草かけし五月のけふそ忘れぬ

二〇六 いつまでかわれもしのはむたちはなの下吹風に残るむかしを

題不知

二〇七 問人のあとなき庭の思ひ草秋にあきそふ露やおくらん

『二四オ

二〇八 はな薄まねくたもとの秋風にしはしとまらぬ野邊の夕つつ

文永二年八月十五夜五首哥合に未出月<sup>1</sup>

二〇九 まつ程の空に心をつくせとや猶いてやらぬ秋のよの月

三〇六—新拾遺夏三三、題しらず、式乾門院御匣。

三〇四ノ次1萩—アルイハ「萩」ノ誤写カ。

三〇九—統拾遺秋上三五、文永二年八月十五夜歌合に未出月、同。式乾門院御匣。十五夜歌合三番石未出月、同。1未—大本「末」。

人家和歌集(福田)

月哥の中に

三〇 くもらてやなかめはてまし秋のよの月に昔を思ひ出すは

三一 おもひしる人やなからん秋をへていくよの月に袖ぬらすとも

三二 氷しくひかりもさえやわたるらん千里の濱の秋のよの月

暮秋

三三 おもひやるかたこそなけれめぐりあはむ命もしらぬ秋の別は

海邊雪

三四 ふる雪をやかてふきあけの濱風に波の花さへちりまかひけり

恋哥中に

三五 こと浦に煙のすへはなひくとももしほたれつるかたをわするな

〔以下欠脱ヲ挟ンデ二五へ続クカ〕

○

〔二七カラ欠脱ヲ挟ンデ続ク〕

二六 こひしとも思ふ許はめにみえぬ心をいかゝ人にかたらん

題不知

二七 たくひなき思ひの程もみえなましあさまの山の煙たゝすは

恋哥とて

二八 うきなからかけたにみえはおとなしの川となかるゝ涙成とも

三一―秋風抄「秋、題不知、式乾門院御匣。1ぬらす―秋風抄「はぬる」。  
三二―の―底本・大本ナシ、今補フ。

三三―統括遺雜秋二六、秋の暮の歌、式乾門院御匣。秋風抄秋、暮秋、同。秋風集、秋下四、あきのつくる心をよみ侍りける。式乾門院のみくしけとのゝ別当。

』二四ウ

二七―閑窓撰歌合 十三番右、尚侍家中納言。

三九 あふ事に誰かはかへむおしからてわれたに今はすつる命を

三〇 今はたゝまたれすも哉山の端に月いりなはとたのめやはせし」二五オ

三一 立かへる人のみうたてつれなくて袖にとまれる有曙の月

寄月恋

三三 あり明は猶そかなしきあふまてのかたみとてこそ月は見れとも

題不知

三三 あふと見る夢に心のなくさまてつらきうつゝを何忍ふらん

内裏にて題をさくりて人く哥よませられ

侍けるに恋

三四 こひしさもうきもわかぬたもと哉いつれに落る涙成らん

春日社五首哥合に

三五 うきにかくたへてつれなき玉のをのなきを人の心ともかな』二五ウ

前関白左大臣家の百首に

〔以下一五へ続く〕

○

〔以下続キ未考〕

上海法師三首〔三六〇三六〕

百首哥中に

三九 統拾遺恋二・六七、恋の歌とて、典侍親子朝臣。

三〇 1 端―底本「葉」ヲ見セ消チトシ、「葉」ト改ム。

三三 1 統拾遺恋三・六六、「月前恋といへる心を」典侍親子朝臣。1は―統拾遺「のはイ」。

三六 月をさへかさねてそまつ郭公又もや聞と山ちくらして

虫をよめる

三七 もにすまぬ虫さへ秋はわれからの恨みあれはやねをはなくらん

述懐

三八 かり染のこのよはさても如何せむ夢のちこそ猶かなしけれ

寂忍法師三首〔三九〇三三〕

春の哥中に

「二六オ

三九 よし野山雪にたな引よこ雲のはるにかゝれるあけほのく空

三九一る「アルイハ「な」ノ誤写カ。

題不知

四〇 風にちるこのはのをとゝ聞程に時雨に成ぬのきの玉水

四一 もろともにすむへき山と思へとも月はうきよに出にける哉

寂音法師二首〔三三〇三三〕

秋の哥中に

四二 おきのはにおとつれ染てあはれをはあまたにやらぬ秋のはつかせ

恋

四三 つらしとはいはぬ物からこほるゝやせめて恨みの涙成らん

〔以下続キ未考〕

○

述懐の哥に

二六ウ

三四 うき身とてすてにし物を同よに猶もはかなくふる涙哉

湧出品<sup>1</sup>父少而子老<sup>2</sup>

三五 としふれと松のみとりはかはらぬに霜をいたゞくかけの下草

随喜功德品何況於法會

三六 みなかみを思ひこそやれ谷川のなかれもにほふ菊の下水

法眼禪兼<sup>1</sup>三首〔三七〜三九〕

百首哥中に秋哥

三七 我のみや物をあはれと思ふらん問はや人に秋の夕くれ

恋の哥に

三八 あなち色に出しと忍へとも心にゝぬは涙成けり

二七オ

待恋

三九 たのめてもこぬいつはりの夕暮に待しとなか思はざるらん

法眼弁算二首〔三〇〜三二〕

恋の心を

四〇 おもへたゞうきにたへたる身なりともさのみや人を眼みざるへき

法印良算身まかりて後よみ侍ける

三四 1 に―底本右傍補入。

三三―新後拾遺釈教一四六、湧出品…(以下同上)、法眼源承。1 湧―底本・大本補、新後拾遺ニヨリ改ム。2 品―底本草体ヲ見セ消チニテ再ビ草体トス。

三六―新拾遺釈教一四六、…(同上) 何況於法會、法眼源承。1 況―底本・大本院、新拾遺ニヨリ改ム。一聖 1 参照。

三七 1 兼―底本・大本字形「遍」ニモ近ケレドナホ「兼」ト読マル。

四〇 1 眼―アルイハ「恨」ノ誤写カ。

二四 もろ共に同みちとはなけゝ共それもかなはぬよの習哉

〔以下二四ノ前へ続ク〕

○

〔二六ノ次カラ続ク〕

二四二 心なき我ころもてにおく露や草のたもとのたくひ成らん

松雪

二四二―続千載雜上二七三、秋の歌の中に、前大僧正道玄。

二四三 立かへりまつとも誰かわきてみむいなほの山の峯の白雪 』二七ウ

普光園入道前関白かくれて後寄月懐旧

といふことを

二四四 有しよの其おもかけもたちそひて月にそいとゝねはなかれける

空即是色の心を

二四五 はる秋の花もみちもおしなへてむなしき色そまことなりける

権僧正聖兼六首〔二四六〜三五〇・三六一〕

二四五―続拾遺釈教二三四（詞書同上）、前大僧正道玄。

名所哥中に

二四六 水とりのあをはの山の月かけははらひもあへぬ霜かとそみる

百首哥に

二四七 人めこそまつかれそむれ山里のかきほの草は霜をまつまに 』二八オ

互忍恋

二四七―互―底本「オ」、大本「第」（略字）二近シ、

二四 もろ共にしのひ涙のはては又たかたもとよりうき名もるらん

述懐

二五 人は猶まつへき事のありもせよ我はなにゆへすてぬうきよそ

二六 身のほとおもひしらぬに成ぬともうきにつけてはよをや恨みむ

〔以下三三へ続クカ〕

○

〔某女一首以上〕〔三五〕〔以下続キ未考〕

不逢恋

二五 あふことはしらぬにしけるうき草のうきみはさこそねもみさりけれ

正三位経朝女三首〔三三〕〔三五〕

春の哥に

二五 はることにさそわかれてゆく花なれば桜や風のやとり知らむ 』二八ウ

郭公を

二五 かたらはゝ春のわかれやなくさむとまつもつれなき時鳥哉

深山鹿

二五 うきもたゝ我みひとつと思ひしに猶山深きさをしかのこゑ

従三位範時女三首〔三五〕〔三七〕

寄花恋といふことを

ト改ム。2た―底本「き」ヲ見セ消チトシ、  
今改ム。

二五1―底本「折」(草体)ヲ見セ消チトシ、  
「し」ト改ム。参照。

二五―新後撰春下三、題しらず、正三位経朝女。

二五1―底本「け」ヲ見セ消チトシ、「つ」  
(伝)ト改ム。

二五1―底本「沢」(正字ノ草体)ヲ見セ消チ  
トシ、「深」(草体)ト改ム。

二五 うつろふも如何なる色としらざりし人の心を花にみる哉

寄月恋

二五 わするなといひしも如何成ぬらん其まゝにこそ月はすめとも

右京大夫家人くによませ侍ける一卷経

「二九オ

哥に無量義経

二五 さまゝくにときなかせとも法の水其みなかみはひとつ成るらん

藻壁門院少将十六首「二六〇〜二六三」

「以下二六へ続く」

○

「某女一首以上」「二五〇」「以下続キ未考」

冬哥に

二五 もみち葉をさそふ嵐の山の名もあらはにみゆる神無月哉

鷹司院師卅五首「二五九〜二七〇・四三〜四三九・三五〇〜三五五、他七首散佚カ」

前内大臣基家の百首哥合に春哥

二五 さと人はくさのはつかに袖みえて野への雪まにわかなつむ也

百首哥中に

二六 ふるはけにおもひの外のうきよとて跡たにみせぬ春のあは雪』二九ウ

二六 うつろはむ後をはしらて春ことにこりぬ心の花を待らん

二五 一さ—大本「さき」ト書キ、上ノ「さ」ヲ見セ消チトス。

二五 一如何—大本「如何ト」。

二五 一少—大本「弁」。2 将—底本・大本「持」、今改ム。

二五—建長八年百首歌合百十三番左、鷹司院師。

人家和歌集（福田）

春哥に

二六 われも又涙そくもるかすみつゝうきかけみする月のつらさに

霞色春深といふ事を

二七 今までは風にしられぬ花もあらしなにと霞の山かゝるらん

二八 とまるへきかたみとも見す暮てゆくけしき空成はるの霞は

暮春雨

二九 ふる雨に空さへくるゝころなれははるのゆくらん方もしられす

郭公を

三〇 時鳥つらさ忘るゝひとこゑにまたれし程のうきは物かは  
「三〇オ

三一 郭公涙をからはこととはむかゝるたくひの袖はありやと

〔以下四至へ続ク〕

○

〔二七ノ次カラ続ク〕

春哥中に

三二 まぎのとをあけてよ深き梅かゝにはるのねさめを問人もかな

前大納言為家々の百首哥に

三三 うつろふもめにみぬかせのつらさにてちりぬる花を誰にかこたむ

洞院撰政家百首に花

三三―れ―底本右傍補入。

二六―統拾遺春上六、題しらず、藻壁門院少将。閑窓撰歌合一番左、同。

二九―統拾遺春下三二、題しらず、藻壁門院少将。一々―底本「に」(爾)ヲ見セ消チトシ、「々」ト改ム。大本、右傍補入。二に―統拾遺「も」ト改ム。底本「も」ヲ見セ消チトシ、「み」(三)ト

二五 桜花ちらてしとまるあらましもかなはぬ物と春風そふく

二六 なかくににほふもつらし山桜風のなさけのありてなければ

郭公

二七 今も猶心つくしの時鳥おなしなくねをまたれすも哉

五月雨

二八 待いてむ雲まとたにもみえわかす月のころなき五月雨の空

秋哥に

二九 龍田山このは色つく程はかり時雨にそはぬ秋かせも哉

紅葉を

三〇 さてたにもみつへきものをうす紅葉ちりなむとてや色まさり行

雪

三一 いとゝ又山は雪けの雲さえて時雨しよりもあらし吹也

三二 あと惜むたかならはしの山ちとてつもれる雪を問人のなき

忍恋を

三三 人しれぬ涙の色はかひもなし見せはやとたに思ひよらねは 一三二オ

顕恋

三四 色にいてゝ袖のよそめはふりはてぬ如何にをさへし涙成らん

怨恋

三〇一 洞院撰政家百首 はな、中宮少将。

三〇二 洞院撰政家百首 はな、中宮少将。

三〇三 洞院撰政家百首 ほとゝきす、中宮少将。

三〇四 洞院撰政家百首 さみたれ、中宮少将。

三〇五 統拾遺秋下三六、洞院撰政の家の百首の歌  
六もみち、同。洞院撰政家百首もみち、現存六帖  
将。一龍一底本・大本「滝」(正字)、統拾遺・現  
存六帖等ニヨリ改ム。

三〇六 洞院撰政家百首 もみち、中宮少将。

三〇七 洞院撰政家百首 ゆき、中宮少将。

三〇八 統拾遺冬四四、冬の歌の中に、藻壁門院少  
将。万代冬四五、雪をよみ侍ける、同。閑窓撰  
歌合十一番左、同。洞院撰政家百首ゆき、中宮  
少将。

三〇九 新後拾遺恋一・五六、洞院撰政の家の百首  
の歌に、藻壁門院少将。万代恋一・二七、洞院  
撰政家百首に忍恋を、同。閑窓撰歌合十四番左  
同。1らね一閑窓撰歌合「はら」。

三〇一〇 統後拾遺恋一・六八、題しらず、藻壁門院  
少将。万代恋一・五三、前撰政右大臣の時の百  
首に顕恋を、同。閑窓撰歌合廿一番左、同。

二六〇 よしさらはさてもたえねといひなしてうらむときへは人にしらせし

題不知

二六一 ゆめかともおもはむことのかなしきにたゞ見すしらぬ契とも哉

二六二 月まつといひて涙のこほれなほこぬ人ゆへの空やくもらむ

山家

二六三 さらぬたにたくれつらき山里にとふ人かへるいはのかけはし』三一ウ

安喜門院大貳三首 〔二六四〕二六〇

暁郭公を

二六四 あかつきのおもひをそへて郭公なといひしらぬ空になくらむ

題不知

二六五 如何にせむ思ひ絶にし山水のさすかにかよふ下のこゝろを

母の思ひに侍けるころ人のとふらひて侍ける返事に

二六六 かなしきは又もたくひのあらはこそいかはかりとも人にしらせめ

〔以下続キ未考〕

○

〔アルイハ一六カラ続クカ〕

郭公

二六七 あらましにおもふあまりは郭公なかぬ初ねを心にそきく

二六三 新拾遺雜中一六三、洞院撰政の家の百首の歌に、蕨壁酒院少將。秋風集雜中二七、洞院撰政家百首に、同。閑窓撰歌合廿五番左、同。

二六四 新拾遺夏三三、夏の歌の中に、安喜門院大式。1 ぞへて。底本・大本「そよぐ」。新拾遺ニヨリ改ム。

二六五 1 こゝろ。底本「よ」。ヲ見セ消チトシ、こゝろト改ム。

二六六 1 続拾遺 雜下三三、從三位為繼身まかりける頃人のもとよりいかにばかり心のうちにかと申して侍ける返事に、安喜門院大式。1 侍。大本「待」。2 侍。大本「待」。

冬哥とて

「三二オ

三六 道たえてふりつむ雪や合坂のはてはゆきゝの関と成らむ<sup>1</sup>

三六一とー大本ナシ。

慈願法師三首〔三九〇―元一〕

山家花をよめる

三九 さひしとて心うかれし山里は花さきてこそ見るへかりけれ

冬月

三九 までしはしくもりもはてし冬のよの時雨るゝ山を出る月かけ

旅哥に

三九 都をは夜ふかく出て合坂の関にそとりの聲は聞ゆる

正遠法師一首〔三九二〕

百首哥中に

『三二ウ

三九 このころのくもやまことの雲ならん花は散にし三吉のゝ山

教願法師一首〔三九三〕

述懐をよめる

三九 うきよをは心とすてし古里のなと今さらに恋しかるらん<sup>1</sup>

道意法師一首〔三九カ〕

〔以下アルイハ二五へ続クカ〕

○

三九一古―底本「旧」(正字ノ草体)ヲ見セ消チトシ、「古」ト改ム。

〔以下アルイハニセカラ続クカ〕

安嘉門院右衛門佐八首〔二五〇〜三〇〕

文永八年七月七日白河殿百首に鶯

二四鶯も物うからてやぶくかせの枝をならさぬ花になくらむ

紅葉

二五もみちはのちしほしらるゝたもと哉時雨をからぬ涙なれとも」三三オ

前左大臣家十首哥に

二六さらに身をなけかしとてもかなしきは命つれなき秋の夕くれ

寄秋風恋を

二七あき風の吹にまかせてまくす原われとは人をうらみやはする

忍絶恋

二八なひくともほには出しとしの薄おもひしなかは霜かれにけり

白川殿の百首に逢不遇恋

二九そのまゝにむすひたえても山の井の猶あかさりし影はわすれす

山を

三〇いとひても猶うき時にこりはてゝうかれし山はまたもたつねす』三三ウ

橋

三一立かへり昔のまゝにふみゝても又やたえなむふるのたか橋

二五〇一嘉一本「喜」。

二七、統拾遺恋四、一三六、山階入道左大臣の家の十首の歌に寄秋風恋、安嘉門院四條。

二八、新拾遺恋五、一三三、題しらず、安嘉門院四條。一おも「新拾遺」忍。

新院弁内侍十一首〔四九〇〜五〇二・四九〇〜四九六、他二首散佚カ〕

〔以下四九〇へ続くカ〕

○

〔四三カラ続く〕

題不知

三〇三 とにかくに袖こそぬるれ村時雨すぎぬるかたを思ひいつれば

初雪

三〇四 今日も猶しくるゝ雲とみる程にはるれは残る峯のしら雪

前左大臣家十首に名所松

三〇五 ゆきゝにはたのむかけそとたちよりていそちなれぬるしかの濱松

寄山述懐を

三〇六 われなから心のおくもみるはかりしのふの山にやともとめてん

懐旧

三〇七 わすれすようきかなかにも思ひいての身の程許有し昔は

権中納言公宗かくれての三月尽に前左大臣のもとへ

申つかはしける

三〇八 うかりけるはるのわかれと思ふにも涙にくるゝ今日のかなしさ

五智如来哥よみ侍けるに平等性智

「三四オ

三〇四―統拾遺雜上二〇三、山階入道左大臣の家の十首の歌に名所松、法印良覺。現存卅六人詩歌乙帖、參詣日吉社路次之詠、同。1なれ―現存卅六人詩歌「過」。

三〇五―統後拾遺雜下二七三、寄山述懐を、前大僧正良覺。

三〇六―かな―底本「哉」ヲ見セ消テニテ改ム。

三〇七―新後撰 秋下二二三、権中納言公宗身まかりて後三月尽に山階入道左大臣の許に遣しける、前大僧正良覺。

三〇六 郭公まつとも人のつけなくにいりおなしはつね鳴らん

横川にてひさしく皇后宮の御いのりし侍

『三四ウ

けるに春宮一むまれさせ給たりければ三昧院に  
まいりて思ひつゝけゝる

三〇六一宮一底本章体(字形不分明)ヲ見セ消チニ  
テ楷書ニ改ム。

〔以下欠脱ヲ挾ンデ二八へ続クカ〕

○

〔以下続キ未考〕

寛慶法師二首〔三〇九、三二〇〕

七夕を

三〇九 かさゝきのかはすつはさや七夕の秋のひとよの夢のうき橋

述懐哥とて

三二〇 染てけるこゝろと人もみるはかり色にあらはすことのはも哉

如円法師六首

百首哥中に

三二一 うきことも花のさかりは忘れてちるを待ける我涙哉

款冬を

三二三 問人もこしまか崎に春くれていたつらにちる山吹のはな

月

『三五オ

三二一も一底本「の」(能)ヲ見セ消チトシ、「も」  
ト改ム。

人家和歌集（福田）

三三 くもるとて月をは如何うらむへきたうき物は涙成けり

百首哥中に

三四 よなくのわか思ひねをしるへにて人もおしへぬ夢のかよひち<sup>1</sup>

三五 こゝろなき身はうき事もあらねとも涙そ物は思ひしりける

尺教

三六 よの常の心の外のこゝろそとしるこそ人のしらぬなりけれ

道日法師二首<sup>1</sup>

〔以下続キ未考、アルイハ三突へ続クカ〕

○

〔中務親王家小督六首以上〕〔五七〇三三〕〔コノ前欠脱〕

三七 もの思ふわれなれはとや郭公なくへきころも聲をきかせぬ 『三五ウ

五月雨

三八 思ふ事有しにゝたるたもと哉ほすにほされぬ五月雨の比

螢

三九 ゆくほたる光みせすはねにたてぬ思ひをいかて人のしらまし

萩風

三〇 おとつれぬよはこそなけれ待人をおきふく風と思はましかは

恋哥とて

三五<sup>1</sup>へ―底本「つ」ヲ見セ消テトシ、「へ」ト改ム。

三六ノ次1日―大本字形「同」ニ近シ。

三九<sup>1</sup>く―底本「へ」ヲ見セ消テトシ、「く」ト改ム。

三〇<sup>1</sup>き―大本右傍補入。

三二 かくこひむくひを人の思はてやのちのよ知すつれなかるらん  
三三 さもこそはうき身なり共ちかひてし命にかへてなとわするらん

中務卿親王家播磨二首〔三三三～三三四〕

「三六オ

恋哥中に

三三 はかなくもまよひそめぬる心哉みしは誰とも知ぬこひちに

別心を

三四 かきりあるみちにもとこそ思ひしにこのよなからもわかれぬるかな

平親清女九首〔三五五・三五六～三六七〕

百首哥に

三五 立よるもかことかましき花のかにあやなくにはふ春の衣手<sup>1</sup>

〔以下三六へ続ク〕

○

〔三四〇ノ次カラ続ク〕

三六 難波かた浦風荒き波まより時雨てみゆる淡路嶋山

恋哥中に

三七 うき人を忘るゝ程のこゝろたになとか我身に任せさるらん 『三六ウ

依変疑恋

三六 いつはりをさのみはよもとたのむこそ我心さへうたかはれけれ

三二—統拾遺恋二・六六、恋の歌の中に、中務卿  
宗尊親王家小督。一〇一—底本「う」ヲ見セ消テ  
トシ、「こ」ト改ム。三三—参照。三三—参照。

三五—衣—底本草体ヲ見セ消テニテ行書ニ改ム。

三七—を—底本「お」於「ヲ見セ消テトシ、」を  
改ム。

述懐

三九 うき事をおもひつゝけてねぬるよは夢のうちにもねそなかけける

三九 新後撰雑中二四四、題しらず、法印定意。

円俊法師一首〔三三〇〕

秋哥中に

三〇 ひとりぬる枕に近き葦とを草はとねをや鳴らん

実承法師一首〔三三一〕

寄月恋を

三一 おもひ出るおもかけまでやつらからんわかるゝ空の有曙の月」三七オ

朝守法師二首〔三三二～三三三〕

百首哥に恋

三三 わかれちは夕つけ鳥のつらきねにうきかゝすそふ鐘のおと哉

母身まかりて第三年に懐旧を

三三 めくりあふみとせの今日の月もこそうかりし物のかたみ成けれ

三三 一こ一底本「つ」ヲ見セ消チトシ、「こ」ト改ム。三三 一参照。

〔以下続キ未考〕

○

〔アルイハモ三カラ続クカ〕

三四 よの中をなけかむためとなれるみやうきにたえてはいとはさるらん

三四 一え一底本「み」ヲ見セ消チトシ、「え」ト改ム。三三 一参照。

観存法師二首〔三三五～三三六〕

題不知

三三 ちる花にそへし心のかへりてやくれ行はるを又したふらん

述懐

『三七ウ

三六 いつまでと思ふ心のなかりせは何になくさむうきみならまし

巖性法師一首〔三三〕

秋哥に

三七 秋深きときは山の鹿のねに色なきつまやつれなかるらん

了性法師二首〔三六、三九〕

恋哥中に

三八 逢まてを物思ふことのかきりにてあけ行空にわかれすも哉

題不知

三九 あたしよにつぬにはとまる人もなしをくれさきたつねのみなかれて

定意法師五首〔三四・三六、三九〕

「三八オ

款冬をよめる

三四 山吹の花こそいはぬ色ならめさきなはつけよいての里人

海邊時雨

〔以下三六へ続く〕

○

〔某法師一首以上〕〔三三〕〔以下統キ未考〕

三二 もみち葉を風に任てゆく秋はかたみまでこそとまらさりけれ

唯教法師二首〔三三〕〔三三〕

初聞郭公といふ事を

三三 なへてよの人きけとてや時鳥ぬしきたまらぬはつねなくらん

平のときもち身まかりて後かのすみ侍り

けるところあけにけるを見てよめる

三三 みし人のあらましかはと思ひいてゝなき跡までもぬるゝ袖哉』三八ウ

行然法師三首〔三四〕〔三四〕

冬哥中に

三四 紅葉せし木ゝのこのはゝ散はてゝ松こそ山のあるしなりけれ

初恋のころを

三五 おもひかねもらす心のうちは猶しのひしよりもくるしかりけり

述懐

三六 よの中をそむきて後もかなしきはいとふをしらぬ命成けり

能慶法師二首〔三六〕〔三六〕

川上月を

三七 つくはねの峯さしのほる月<sup>1</sup>かけに氷て落るみなの川なみ 』三九オ

三六1いー底本右傍補入。

三七1るー底本「か」(可)ヲ見セ消テトシ、「る」(留)ト改ム。

述懐

三六 山にても猶うき時の心こそよをいてはてぬ程はしりけれ

寂恵法師五首〔三六〇〜三六三〕

梅をよめる

三六〇 あちきなく人のためとはうへさりしのきはの梅に誰を待らん

春月

三六一 涙こそうき物なれやはるのよはくもりもはてぬ月と聞しに

題不知

三六二 ものおもふ身とていとほし郭公いつれの年かこゑをきくへき

恋哥に

『三九ウ

三六三 いかにせむさもことしけきよひのまをしはしとまたて人のかへらは

述懐

三六四 うつせみのむなしきよとは思へとも猶うきからにねこそなかるれ

親道法師三首〔三六四〜三六六、他一首散佚カ〕

百首哥中に三月尽

三六五 如何にせむいけらは後のはるに又あはむあはしもしらぬ別を

月を

三六六 くもらしな涙はかりはしくるとも袖より外の秋のよの月

暮秋

〔以下続キ未考〕

○

〔四五九カラ続ク〕

惜秋

「四〇オ

三六 かぎりある秋より外の日かすをはなきになしてやけふをしたはん

寶治二年百首に落葉を

三五 かたみとて秋のとめけるもみちはをうたてもさそふ山をろし哉

百首哥中に

三二 おしなへてうきはうへのみこほりつゝ下はえならぬほともしられす

三三 心からなにか難波の浦千とりうきめかるてふかたにしもなく

夕恋を

三〇 たゝにこそ身にしむ風もきこえしか人またさりし秋の夕くれ

恋哥中に

三一 身にかへはたかなはたゝしとはかりに今までつらきよにもふるかな』四〇ウ

三二 うつゝとも夢ともわかすなかゝの物思ひそふるけさの心ちは

三三 まとろまぬ程にみしかはけさは又うきを夢とも思ひなされす

文永五年八月十五夜内裏五首哥合に月

三五―宝治御百首冬、落葉、〔鷹司院〕帥。

三二―え―底本「み」ヲ見セ消チトシ、「え」ト改ム。

三三―続拾遺恋三・九九、中務卿宗尊親王の家の百首の歌に恋の心を、鷹司院帥。

驚絶恋といふ事を

三六 今はたゞ人をも身をも恨みねと月に涙ぞ猶残ける

題不知

三五 いつか又かけをたにみむをきわかれうかりしまゝの有曙月

〔以下欠脱カ〕

○

〔以下統キ未考、アルイハ三六ノ次カラ続クカ〕

郭公

三六 みよし野の山郭公待人は花より後も帰らさりけり

坐禅の時よめる

「四一オ

三七 ゆり<sup>1</sup>のうへにしつかなるよの暁は心にのこるおもかけもなし

禅春法師一首〔三六〕

恋哥中に

三六 いつはりと思ふ心もなきまてにたのむはなにの行系成らん

順空法師一首〔三九〕

寄時雨述懐を

三九 よをいとふ心やもとに帰らむうきに時雨るゝ冬の山里

貞雲法師一首〔三〇〕

三六 一驚 底本・大本「驚」ニ近シ、今改ム。

三七 一ゆり 底本・大本「り」(里) トアレド、アルイハ「か」(可)ノ誤写カ。  
三六 一春 底本・大本字形不分明、アルイハ「宿」モシクハ「寮」カ。

百首哥中に

三〇 あはれなとよのことはりのうきにたに思ひなされぬ我身なるらん』四一ウ

〔一行空白〕

慈性法師三首〔三二〕三三・三四カ〕

恋哥中に

三一 あらはれてたつとなみえそふしの根の煙もよその思ならねは

三二 あわてこそ猶うかりけれ人のみをなはらし物と何思けん

題不知

〔以下アルイハ三四へ続クカ〕

○

〔法印憲実二首以上〕〔三五〕三六四〔欠脱ヲ挟ンデ五七カラ続クカ〕

右京大夫行家人々によませ侍ける住吉社哥

合に恨絶恋

三三 なひくかとみえしもしほの煙たに今は跡なき浦風そ吹

旅泊風を

三四 都いてゝかゝる所のたひねにもなれすはいかゝすまの浦かせ

権大僧都公朝廿八首〔三五〕三六・四四〇三四、他十首散佚カ〕

春哥中に

〔四二オ

三二 思 底本「思火」ヲ見セ消チトシ、「思」ト改ム。  
三三 一は 底本・大本アレド衍カ。

三三 一 続拾遺恋五・二〇三、恨絶恋、法印憲実。

三四 一 一か 底本「よ」ヲ見セ消チトシ、「か」ト改ム。

三七 山たかみまことの雲もかゝるらん<sup>1</sup>いかゝさのみは桜なるへき

三七―いかゝ―大本右傍補入。

三七 まつ事もなしと思ひし老かよの心にかゝる山桜かな

百首哥に

三七 桜花たをる人にはゆるすとも嵐におしめ春の山もり

郭公

三七 一こゑもなさけなりけり時鳥あはれとそ思ふ有明の空

五月雨

『四二ウ

三七 大井川いくひのうへに波こえてせくとも見えぬ五月雨の比

三六 ふちは瀬にかわると聞しあすか川たかいつはりそ五月雨のころ

三六―新千載夏三、題しらず、前大僧正公朝。

秋哥に

三六 わひつゝも住ならひにしよの中の又あちきなき秋の夕くれ

〔以下四二四へ続く〕

○

〔五〇カラ続くカ〕

題不知

三三 わかきみのためしにすへき松も猶としさたまれる物とこそきけ

法印尊海十五首〔三三〜三九・四三〜四九〕

はるの比難波のかたにまかりて

三六三 いかみみていかに語らむ難波多やかすめるかたの芦の村たち<sup>1</sup>

百首哥中に

「四三オ

三六一芦―底本「蘆」ヲ見セ消チニテ改ム。

三六四 花を猶みはやと思ふこゝろこそうきに残れる昔成けれ

三六五 よのつねに聞とや思ふ郭公老のねさめのまたふかきよは

三六六 われ許よをはなけかし郭公聲にたてゝは待わたるらん

題不知

三六七 ならやまをゆふこえくれは古里のとふひ野のへに鹿そなくなる

中務卿親王家十首哥合に見月

三六七 夫木十二鹿三、題不知、明玉、法印尊海。

三六八 身につもる老の行ゑのかなしさも忘れてみつるよはの月かな

惜秋

三六九 まてしはし身はなゝそちになりぬともしらてや秋のすきむとすらん

光俊朝臣よませ侍ける春日社五首哥合に雪

『四三ウ

三七〇 しはしこそたまれはかてにはらひつれ風をもうつむ松の雪かな<sup>1</sup><sup>2</sup>

山家を

〔以下四三へ続ク〕

○

〔四一カラ続ク〕

三七一に―大本ナシ。2つ―アルイハ「ら」ノ誤写カ。

勝林寺にまかれりけるに思順上人ありきたか

ひて対面をとけさりければかのてらの僧のも  
とにつかわしける

元一 ことふへき人なき寺と聞し<sup>1</sup>よりとふにとはれぬみちはしりにき

十界哥中に地獄

元一 聞一 大本「きこ」(ルビナシ)。

元二 きえはてはさてもやむへき露のみを又ふきむすふ風はうらめし  
二乗成佛

元三 あやなくもあらぬ山ちとおもふ哉このをくにこそ花もさくなれ

聲聞の心を

「四四オ

元四 はかなくもゆきはてぬとやおもひけんおしかなく野の秋の夕くれ

藤原隆祐朝臣身まかりて後四十八願哥人

元三 統拾遺釈教三云、二乗成仏の心を、法印  
定田。一山ち統拾遺「み山」。2も統拾遺  
「は」。

元四 1 聞一 底本草体ヲ見セ消チトシ、改メテ草  
体ヲ書ク。

のすゝめ侍りけるに佛光無邊願

元五 月はいさこれこそくらき道までも遙にてらす光成けれ

法印道雲三首 (元六、元七、他一首散佚カ)

百首哥中に懐旧

元六 今もけに見るはうつゝにあらねとも昔の夢は猶そこひしき

あさかほを

元七 けさまてはよそにそみつる朝かほの夕の露や我身なるらん

〔以下欠脱ヲ挟ンデ毛ニヘ続クカ〕

元七 1 は 底本「も」(毛)ヲ見セ消チトシ、「は」  
(者)ト改ム。

○  
〔僧都某二首以上〕〔三六〇〃三六二〕〔欠脱ヲ挟ンデ四四カラ続クカ〕

百首哥中に

『四四ウ

三六〇 うきたひによをは恨みすかすならぬ身のとかとのみ思ひしられて

三六一 玉くしけふたかみ山にてる月のかけはくもらぬかゝみ成けり

三六一玉―底本草体ヲ見セ消テニテ楷書ニ改ム。

権少僧都成宣一首〔四〇〇〕

あらさる外のことによりてなき名たちける時

北野社に祈請してよみ侍ける

四〇〇 くもりなき神は空にそ知らめはあふきてはるゝ時をこそまで

権少僧都教範一首〔四〇一〕

草庵<sup>2</sup>月を

四〇一 夜もすからいつくに月のやとらまし露けき草のいほりならずは

法眼源全七首〔四〇二〕〔四〇五〕〔四三三〕〔四四五〕

「四五オ

光俊朝臣よませ侍りける百首に

四〇二 これやみしその神山の桜花老木は春の色そすくなき

四〇三 さためなき命にはるをまちみても又<sup>1</sup>ちる花に物や思はん

秋哥に

四〇三 1 又―大本右傍補入。

四〇四 もの思へはことのほかなる涙哉よの常なりし秋の夕へを

四〇四 1 都―底本・大本「朝」、今改ム。2 庵―底本「菴」ヲ見セ消テトシ、「庵」ト改ム。

四〇五 年ことにあひみることとは命にて老のかすそふ秋のよの月

日吉社によみて奉りける百首哥に旅<sup>1</sup>

〔以下四三へ続ク〕

○

〔四五三カラ続ク〕

寄花無常<sup>1</sup>

四〇六 みる人のなきかゝすそふはることに花もあたるよをやらん

わつらひ侍りけるころしくれをきゝて

『四五ウ』

四〇七 めくりあはむ残の秋も定めなき時雨は老の涙成けり

母身まかりて後ふるきあとの月を見て

四〇八 古里にかわらすすめる月みれと猶なきかけそかなしかりける

八識種子といふ事を

四〇九 種しあれば人の心の八十桜つゐにさとりもひらけさらめや

浄土要文哥に彼佛寿命及其人民無量無邊

阿僧祇劫故名阿弥陀<sup>2</sup>

四一〇 人をみなうきにかへさぬあわれみそわかかきりなき命ともなる

地獄猛火化為清澶風

四一一 するへするよはの螢もつけさりきもゆるをやかて秋のかせとは<sup>1</sup> 四六オ

四〇五―風雅雜上一五三、月の歌の中に、法印源全。

四〇六―次1旅―大本「懐」。一六一参照。

四〇六―三十六人大歌合―十五番左、法印実伊。<sup>1</sup>  
寄花無常―大本「寄花」ヲ前行ニ続ケテ書キ、  
行末ニ至リ改行。解説第二節参照。

四〇八―新統古今哀傷―一五三、前大納言伊平身まか  
りて後詠み侍りける。前僧正実伊。<sup>1</sup>と―新統  
古今「は」。

四一〇―文―底本・大本「又」、今改ム。2劫―底  
本「劫」。大本ニヨリ改ム。

四一一―き―大本右傍補入。

法印良覚十首〔四二〕四三・三三〕三六、他一首散佚〕

春哥に

四二 これのみそうきみのはるとなくさめて花より外はまつ事もなし

暮秋を

四三 うきにそふ我みの秋はつきもせておしむにくるゝ長月の空

〔以下三へ続く〕

○

〔三六カラ続く〕

四四 あさちふのをのにしめゆふたくれを猶たのめとやまつ虫のなく

鹿

四五 ねてあかす人をうしとやさをしかのをしと思ふよの月になくらん

月

四六 くもるとていとふもしらす老らくの涙もよをす秋の夜の月 』四六ウ

四七 わひ人の涙もとむる月かけにちきり有ける我たもと哉

冬哥とて

四八 さらしなやおはすて山の夕時雨月みしよりも袖はぬれけり

四九 いかるかのよるかの池はこほれともとみのおかはそたえすなかるゝ

中務卿親王家三首哥合に千鳥

四〇 あはれにそ老のねさめの友千鳥わかよふけぬる月になくなる

恋心を

四二 こめやとは思ふ物から雨ふりてねられぬよはそ人は待るゝ

別恋

四三 暁は帰る袖こそぬれまされとまるもおなし別なれとも

「四七オ

四三 あるよそと思ふ許のなくさめやいける別のたのみ成らん

寄夢恋

四四 月草の花すり衣かへすよはうつろふ人そ夢にみえける

「以下欠脱ヲ挾ンデ三九へ続クカ」

○

「某女二首以上」〔四三五〜四三六〕〔以下続キ未考〕

秋哥に

四五 雨はるゝのきはの山は霧こめてしかのねとをき夕くれの空

恋

四六 まてとたにたのめもおかぬよひく心に心と月をなかめつる哉

皇后宮内侍三首〔四三七〜四三九〕

秋哥中に

四七 ほに出てまねくけしきをしの薄しのひもあへぬ袖かとそみる』四七ウ

四四―新後撰恋五・二五、寄夢恋を、前僧正公朝。1衣―底本「花」ヲ見セ消チトシ、「衣」ト改ム。

前左大臣家十首に忍恋

四六 いはしるのまつのはしと忍ふれと色にはいてすむすほれつゝ  
題不知

四六1の—底本「や」ヲ見セ消チトシ、「の」ト改ム。2ほ—トニ「と」脱カ。

四九 たのめける人の契はむなしくてひとりそみつる有曙の月

安嘉門按察五首〔四〇〕、他二首散佚カ〕

四〇—嘉—大本「喜」。

春哥中に

四〇 するしらす道のゆきゝに問人のたよりすぐさぬ花の比かな

春月

四一 雲と見てよそにや人のいとふらん花にかくるゝ山のはの月

夏草を

「四八オ

四二 さらてたにみちの間もなき我やとを草はにかこつ夏はきにけり

〔以下統キ未考〕

○

〔三六〕ノ次カラ続ク〕

四三 今さらにくやしかりけり山里にすまてうきよをなに歎きけん

四三—新千載雑下三六、題しらず、法印尊海。

百首哥中に

四四 山里につまぎこるへき道をたに求めかねたるよをもふるかな

四五 いたつらにおいぬる身をもなげかれす花さけはみつとりなけはきく

四六 今はよに身はなきものとしりながら猶山すけのねこそなかるれ

四七 つくくと思へはかなし何事も後をまつへき身のよはひかは

高野にまうてける時とまりて侍けるやとの

あるし又はいつかと申ければ

四八 又こむとみこそ契らね身は老ぬよは定めなし道ははるけし 四八ウ

よをのかれて侍りける人のもとへ

四九 はかなくて身こそうきよをすてさらめのかるゝ人をなになけくらん

法印尊家二首〔四〇〇〕〔四〇一〕

題不知

四〇 枕のみしらはしるへきわかれちをくるもつらし有明の月

四一 はるの花秋の紅葉もみそしらぬわかたつ柚の谷のむもれ木

法印公宗二首〔四〇二〕他一首散佚カ

百首哥中に

四二 かすならぬ身をは思はず山里の花をあるしとふひと1も哉

四二一ト大本ナシ。

〔以下欠脱ヲ挟ンデ四三へ続クカ〕

○

〔四五カラ続ク〕

四三 いく里の夕くれことにやとかりて都へたつるひかす成らん 四九オ

題不知

四四 いたつらに老の命のなからへて涙となるは昔なりけり

四四 おく山のよ川の水をたつねきて深きみのりのなかれをそくむ

法眼有海二首〔四六、四七〕

述懐哥中に

四六 さりともとみのゆく末をたのみこし心もよはる老そかなしき

寶塔品の心を

四七 古里は玉しく庭と成にけりあさちか露に月をやとして

法眼覚基三首〔四八、四九〕

秋哥に

四九ウ

四八 おほかたの秋は習といひなからうき身にかきる袖の露哉

述懐

四九 うきよそと思ひしりてもいとぬは如何につれなき心成らん

前権僧正勝尊かくれて俊とふらひて侍ける人の

返事に

四〇 おとろかすことのはさへもかなしきはうきよの夢の別なりけり

法眼源承三首〔三一、三二、三三〕

〔以下三言へ続ク〕

四〇 続門葉雑下、権僧正勝尊かくれて俊とふらひて侍ける返事にそへ侍りける法眼覚基。

夏月

四二 うたゝねにはかなくあくる夏のよは見はてぬ月のかけそかなしき

七夕

「五〇オ

四三 なかれても今日をこそまで天川つるによるせの絶ぬたのみに

文永二年八月十五夜哥合に未出月

四四 如何にして誰ゆへならぬなかも山のあなたの月にしられん

同五年内裏哥合對月問昔といふことを

四五 月ならて又誰にかは事とはむみぬよの秋の昔かたりを

百首哥に

四六 婦さのおちかた人の袖もみすまた霧はれぬ宇治のわたりは

秋夕

四七 なげかしと思ひすてゝもいかゝせむうき身にそへる秋の夕くれ

中務卿親王家の十首哥合に同心を

『五〇ウ

四八 いかにせむ袖に涙のかゝらても有にし物を秋の夕くれ

見月

四九 袖のうへの涙しなくはかけやとす月にうき身やしられさらまし

四三―十五夜歌合 十五番右、鷹司院帥。1未―  
大本「未」。

四五―統拾遺雜秋卷三、月の歌とて、鷹司院帥。

紅葉

四六 もみちはの色に出てや山姫も我身しくるゝ秋をみすらむ

〔以下三五へ続く〕

○

〔三五カラ続く〕

四六 あま衣今や擣らむ夜さむなるたみ野の鳴の秋のしほかせ

四六 あはれわかそてをみせはや人つてにきけはそ猶<sup>2</sup>とたのまさるらん

恋百首哥よみ侍けるに

四三 とへかした袖ほしわふるこのころの空もをやまぬ春のなかめを

四三 我そて<sup>1</sup>のたくひ成らし紅葉はにたまれるかりの秋の涙は 「五一オ

題不知

四六 年ふれと有しなからのおもかけや身をもはなれぬかたみ成らん

四六 いくよわれ涙に月をやとすらむ思ひ出よといひしはかりに

旅<sup>1</sup>

四六 都にてみしにはなにもかわりけりおなし空ゆく月日ならては

百首哥中に

四六 あちぎなくなにか歎<sup>1</sup>けんくれ竹のうきふしとても夢のよなれは

平親清女妹七首〔四六へ〕、他四首散佚カ〕

四六<sup>1</sup>て―底本「く」ヲ見セ消チトシ、「て」ト改ム。2と―アルイハ「も」ノ誤写カ。

四三<sup>1</sup>て―底本「く」ヲ見セ消チトシ、「て」ト改ム。

四六<sup>1</sup>と―底本「は」(者)ヲ見セ消チトシ、「と」ト改ム。

四六<sup>1</sup>旅―底本「手篇二哀」ヲ見セ消チトシ、「旅」ト改ム。一八一参照。

四六<sup>1</sup>け―底本・大本「け」(介)ナレド、「か」ノ誤写カ。

四六<sup>1</sup>親―底本「示篇二尺」ヲ見セ消チトシ、「秋」(篇旁逆)トス。大本「秋」今改ム。

百首哥に

四六 をしからぬうきみもはるにあふまてと思へは花そ命成ける 』五一ウ  
四九 思はずよつひにちるへき花なれと昨日今日とは春の山かせ

昌蒲を

四〇 いか<sup>1</sup> うきね許はかゝるらんなにのあやめもしらぬたもとに

〔以下続キ未考〕

○

〔二七カラ続ク〕

百首哥に

四一 身をしれはまつにもあらすたのめしをこよひそかしと思ふはかりそ

四二 こぬまでも月をみてこそなくさまめまつにまされるよひの雨哉

四三 心には人をまちつゝ山のはの月をといはゝつきやうらみむ

春日社五首哥合に恋

四四 ありしよりなと恋しさの増るらんわすれなむとも思ひよらぬを

恋哥に

四五 いつはりのとりのそらねはよふかきにたかまことゝかをきわかるらん

題不知

四六 なくさまてははは物こそかなしけれ人によりてや月も見ゆらん

「五二オ

四〇<sup>1</sup>〔空白〕「なれは」アルイハ「にして」カ。

四七 いかにもせむ難波の事もこのうへてあし火たくやのすゝまれぬみを

四八 心にはわれもなく又人もなしなにをいかにと思ひわくらん

四九 忘れては又うつゝにそまよひぬる夢とのみこそ思ふへきよを

夕述懐

四〇 うき事やあすはかはるとたのむ哉くるゝを今日のなさけにはして

母身まかりて又のとし光俊朝臣の百首を

和し侍りけるに

『五二ウ』

四一 こそこえし人の秋には郭公しての山にもあはすや有けん

〔以下五二へ続ク〕

○

〔法印実伊十八首以上〕〔四三〇～四三三・四三六～四三九〕〔欠脱ヲ挾ンデ四四二カラ続クカ〕

杜冬月

四二 なかめきくおいそのもりの冬かれに月も我身も今そさひしき

光俊朝臣よませ侍ける春日社五首哥合に歳暮

四三 いつもかくあけてはくるゝおなしひを今日はととしてなに惜らん

恋哥中に

四四 人しれすこかるゝものは煙たちもゆともみえぬ思ひなりけり

四五 我恋のためしやなにそふしのねもけふは思ひの煙ならねは

四六 きぬくのつらきわかれのあか月をしはしとなかぬとりのねそうき  
四七 たのますよこれはあるよの別とも又あふまての命しらねは 一五三オ  
四八 波たかきなるとのをきのあまを舟をしかへしてや猶恨みまし

中務卿親王家百首哥に恋

四九 我袖にかすかく許ゆく水やはかなき恋の涙成らん  
五〇 はてはわか思ひしらぬに成やせんつらきを忍ふころなかさは

述懐

五一 うつせみの命をよしみねをそなく有てうきよのむなしたのみに

題不知

五二 みてすくるよそちの夢のおもかけそ今と思へは昔成ける

五三 おとろかす心も外になかりけりわれとそよはの夢はさめける

〔以下四〇六へ続く〕

○

四四 袖ぬれて秋をくつゆのかなしさやをつとはみえぬ涙成らむ 一五三ウ

暮秋を

四五 月たにもあり明ならはくれてゆく秋のなこりは空にみてまし

冬哥中に

四六 冬のくる神なひ山の村時雨ふらははともにとちるこのは哉

四六 新拾遺離別三、別の心を、前大僧正実伊。  
1のま―底本―大本「ちさ」(地左)、新拾遺三  
ヨリ「のま(能方)ノ誤写ト見テ改ム。2る―  
大本「か」。

四九 続拾遺恋二・八五、恋の歌の中に、権僧正  
実伊。

四五 玉葉釈教三六七、中務卿宗尊親王の家の百  
首の歌に、前僧正実伊。

四六―続拾遺冬三、初冬の心を、院弁内侍。

雪いたうふりたる朝人ノ鳥羽殿へまいりけるに  
らひせいもんの石すへもうつもれたるをみて

四七 いにしへのあとこそみえねふる雪にうつもれぬ名はありときけとも

忍恋を

四六 おもふ事さはかりしのふ心にもあらておつるは涙成けり

〔以下欠脱カ〕

〔三〇ノ次カラ続クカ〕

宝治二年百首哥に翫花

一五四オ

四九 をりてみむことのみそよき桜花うつし心はちりもこそすれ

花哥中に

五〇 をのつかからかせのやとせる白雲のしはしとみゆる山桜哉

五二 なからへていけらはのちのはるとたに契らぬさきに花のちりぬる

みな月のころかせすしく吹て村さめしたる

朝萩戸のかたたくにはみすてかたくてよみ侍

りける

五三 またさかぬ萩の下はに露ちりてすしく成ぬ村雨の室

〔アルイハ四四へ続クカ〕

〔三行余白〕

一五四ウ

四七 一らひせいもん 羅生門カ。

四九 一現存六帖六さくら、弁内侍。宝治御百首「うらひ」。  
春、翫花 同。 一よ 宝治御百首「うらひ」。

五〇 一統拾遺春下巻、題しらず、院弁内侍。

五二 一新後撰雑上三巻、題しらず、弁内侍。現  
存六帖六はな、同。 一の新後撰「そ」。

五三 一新統古今 夏三六、……（同上）村雨打ちそ  
うきたるあした萩の戸のかた見すぐしがたく  
て、後深草院弁内侍。

構造復元私案

現存本文に見られる錯乱の復元案については、右の翻刻中にその都度示したが、ここでそれらをまとめて見やすく表示しておく。煩を避けて題・詞書および歌は省き、作者名と歌数を記した標目のみを原形と推定した順序に挙げ、現存本で一続きの部分ごと括弧してその通し番号（丸で囲む）と錯乱前の推定行数とを下に付した。

但し、特に卷九・十においては、疑問符を付した番号の歌の位置や○印を挿入した部分の連接は確定しがたい。従って、卷九の中途以後は、厳密には一区切りの群（ブロック）ごととその中の順序をつけたと言うにとどまる。また、現存本に標目の見えない作者名等は、角括弧に入れて示した。

<p>人家和歌集卷第八</p> <p>前大僧正公豪 九首 (一七九)</p> <p>前大僧正道慶 二首 (二〇〇～二〇一)</p> <p>前大僧正隆弁 十七首 (二二〇～二二六)</p> <p>前大僧正道勝 三首 (二九〇～二九二)</p> <p>前大僧正澄覚 十五首 (三三〇～三四〇)</p> <p>〔欠脱〕</p> <p>〔僧正 某 一首以上〕 (三三)</p> <p>権僧正定济 三首 (三三〇～三三二)</p> <p>前権僧正道玄 八首 (三四一～三四七)</p>		<p>① 八一行カ</p>
<p>権僧正聖兼 六首 (四六六～四五〇)</p> <p>法印尊海 十五首 (三八三～三九〇)</p> <p>法印尊家 二首 (四四〇～四四一)</p> <p>法印公宗 二首 (四四〇)</p> <p>〔欠脱〕</p> <p>〔法印実伊 十八首以上〕 (四〇六～四二一)</p>		<p>②〇 一八行</p> <p>③⑤ 一八行</p> <p>④① 一八行</p> <p>欠脱 2</p>
<p>〔若干首散佚〕</p>		<p>③⑧ 一八行</p>







索引

一、今回翻刻した本文とそこに付した歌番号によって初二句索引と作者索引とを作成し、左に掲げる。

二、初二句索引は、右に翻刻した本文のすべての歌の初二句を採り、それを歴史的仮名遣の五十音順に排列した。

三、作者索引は、本文の歌の作者として判明するものすべてを採り、それを慣用読みとした上、現代仮名遣の五十音順によって排列し、表記されている官位・称号または宮仕え先等を括弧に入れて付記した。なお、本文の欠脱によって標記の部分を書いてある作者の項は、角括弧で括った。

各作者の歌の所在は、原則としてその第一首の番号によって示したが、標目と第一首との間に錯乱による切れ目があると考えられる場合には、標目の所在を示した。

初二句索引

あ	あかさりし	そてかとはほふ	一六三	あ	あきかせの	ふくにまかせて	二九七	あ	あたらよの	あめのうちにそ	一〇三
	あかすみる	こころをはなに	一七〇		あきのよの	かたふくつきの	二一三		あちきなく	なにかなけかむ	四七〇
	あかつきの	あらしやかはる	二〇		あきふかき	ときはのやまの	三三七		あつめおく	まとのほたるよ	三三
	あかつきの	おもひをそへて	二四		あくかれて	たちかへるにそ	二六		あとをしむ	たかならはしの	二七七
	あかつきの	とりのはつねに	六九		あさちふの	をのにしめゆふ	四四		あなかに	いろにいてしと	三六
	あかつきの	まくらになるる	六〇		あすからは	つきひのゆゑは	四四		あはずとは	おもひしるとも	一四六
	あかつきは	かへるそてこそ	四三		あたしよに	つひにはとまる	三三九		あはてこそ	なほうかりけれ	三三

人家和歌集（福田）

あはれけに	うきよのゆめを	六〇
あはれなと	よのことわりの	三〇〇
あはれにそ	おいのねさめの	四〇〇
あはれわか	そてをみせはや	四六一
あふことに	たれかはかへむ	三二九
あふことは	しらぬにしける	三五一
あふとみる	ゆめにこころの	三三三
あふまてを	ものおもふことの	三三六
あまころも	いまやうつらむ	四〇〇
あめはるる	のきはのやまは	四〇五
あやしくも	ねをのみしのふ	一七一
あやなくも	あらぬやまちと	三九五
あらはれて	たつとなみえそ	三三〇
あらましに	おもふあまりは	二六七
ありあけは	なほそかなしき	三三三
ありしよの	そのおもかけも	三三三
ありしより	なとこひしさの	四七四
あるよそと	おもふばかりの	四三三
いかにして	たれゆゑならぬ	四三三
いか	うきねはかりは	四七〇
いかにせむ	いけらはのちの	三三四
いかにせむ	おもひたえにし	二六五
いかにせむ	さもことしげき	三三三
いかにせむ	そてになみたの	四七〇
いかにせむ	なにはのことも	四七〇
いかにせむ	をしめとあたに	九
いかにみて	いかにかたらむ	三六三
いかるかの	よるかのいけは	四一九
いくさとの	ゆふくれことに	四四三
いくよわれ	なみたにつきを	四四三
いけるよは	あるにもあらぬ	三六
いたつらに	おいぬるみとも	四三三
いたつらに	おいのいのちの	四四四
いたつらに	かけをたにみむ	三六五
いつかまた	あとをはとめし	一七
いつくにも	つゆけきそては	三三
いつとても	おもふころも	三六八
いつはり	とりのそらねは	四七五
いつはりの	さのみはよもと	三三八
いつはりを	わかみのよその	一五一
いつまてか	われものほむ	三〇六
いつまてか	おもふころの	三三六
いつまてと	なさけなりけむ	三六
いつまての	あけてはくるる	四六三
いつもかく	よをうくひすの	三
いととまた	やまはゆきけの	二七六
いとひても	なほうきとき	三〇〇
いにしへの	あとこそみえぬ	四七〇
いのちをは	いかなるひとの	九
いはかねに	たまとかきしき	二七
いはしろの	まつのいはしと	四一六
いまさらに	くやしかりけり	四三三
いまはたた	またれすもかな	三〇〇
いまはたた	ひとをもみをも	三〇〇
いまははや	ときすぎぬらし	三〇四
いまはよに	みはなきものと	三三
いままては	かせにしられぬ	四三三
いまもけに	みるはうつつに	三九六
いまもなほ	こころつくしの	三三三
いりかたき	まことのみちの	六
いろにいてて	いはぬもしるき	一六一
いろにいてて	そてのよそめは	三九
いろかはる	をのほきはら	六四
うかりける	はるのわかれと	三〇〇
うきくもの	とたえてかかる	五
うきことも	はなのさかりは	三二
うきことや	あすはかはると	四六〇
うきことを	おもひつつけて	三九
うきにかく	よをはうらみす	三九
うきながら	たへてつれなき	三三
うきにそふ	かけたにみえは	二八
	わかみのあきは	四三



人家和歌集（福田）

くもりゆく	ひとのころの	七四	こそこえし	ひとのあきには	四九	さくはなの	つひのわかれは	二九
くもるとて	いとふもしらす	四六	こたふへき	ひとなきでらと	三九	さくらはな	たをるひとには	三七
くもるとて	つきをはいかか	三三	ことうらに	けふりのすゑは	二五	さくらはな	ちらてしとまる	二〇
くるとみて	あるへきものを	四七	ことのはの	つゆのなきけの	一九	さすかまた	こころにものを	七
くれたけの	はやまのきりの	一九二	こぬまでも	つきをみてこそ	四三	さすかよも	かくてはとこそ	二五
くれてのち	さきはしめける	一七六	このあきは	ひかすをそへて	五	さためなき	いのちにはるを	四〇
けさはまた	やまのはもなく	九六	このあきも	さすかいのちの	三〇	さてたにも	みつへきものを	二五
けさまでは	よそにそみつる	三九七	このころの	くもやまことの	二九	さてもなほ	かきりあるよの	四
けさみれば	はらひかねたる	一七四	このころは	をきのはかせに	元	さとひとは	くさのはつかに	三九
けさよりは	あきをへたてて	七	このさとも	つきそまたるる	一七	さとりの	みやまかくれの	八
けふとても	あやめそわかぬ	一六六	このねぬる	あしたのとこの	二四	さならては	たのめもおかし	一七
けふはまた	たれをたのめて	一一	このほかに	さとりはなしと	六	さのみまた	みのうきたひに	九
けふまでは	なになからへて	六	このよをは	いとひはてたる	三	さひしとて	こころうかれし	二九
けふもなほ	しくるるくもと	三〇三	こひしさも	うきもわかれぬ	三四	さまさまに	ときなかせとも	三〇
こえはては	さとかとおもふ	一七五	こひしとも	おもふはかりは	二六	きみたれと	ものおもふそらの	一四
ここにては	くもぬにみえて	二四	こひわふる	わかまつやまは	一五	さもこそは	うきみなりとも	三三
ここもなほ	うきよのなかの	一〇六	こほりしく	ひかりもさえや	二二	さゆるよは	たきつこころや	一九
ころろあてに	はるやしるらむ	一六三	こほりせし	やまのたきつせ	二四	さらしなや	をはすてやまの	四八
ころろから	なにかなにはの	三六	こめやとは	おもふものから	三三	さらたに	みちのまもなき	四三
ころろなき	みはうきことも	三五	これのみそ	うきみのはると	四二	さらたに	なけかしとても	二六
ころろなき	わかころもてに	二四二	これやまた	むくいありてや	七	さらぬた	ゆふくれつらき	二六
ころろには	ひとをまちつつ	四七三	さ	そのかみやまの	四〇	さりととも	みのゆくすゑを	四六
ころろには	われとなくまた	四七八	さ	いかにむすひて	一七	しなはやと	おもふこころに	六一





ほととぎす	きなかぬよをや	一四七	みこしちや	はるかにみれば	六九	みるほとも	みしききなつ	一六九
ほととぎす	さしもやまたむ	一三三	みしことは	さなからゆめの	二〇三	みるままに	さくらそしるき	一〇八
ほととぎす	つらさわするる	二六六	みしひとの	あらましかはと	三三三	みをさらぬ	うさをわすれて	一八六
ほととぎす	なみたをからは	三三三	みちたえて	ひととはれば	七六	みをしれば	まつにもあらず	四七一
ほととぎす	まつともひとの	三〇六	みちたえて	ふりつむゆきや	二八八	むかしみし	ひともなききに	三三
ほにいてて	まねくけしきの	四七〇	みちのくの	まかきのしまの	一九	むはたまの	はかなきゆめと	二
ま			みつとりの	あをはのやまの	二四六	むらさめの	そらはなこりも	一九三
ま			みつのおもに	やとれるつきの	一〇〇	めぐりあはむ	のこりのあきも	四〇七
まきのとを	あけてよふかき	二六六	みてすくる	よそちのゆめの	四九三	めぐりあふ	みとせのけふも	三三三
まくらのみ	しらはしるへき	四四四	みなかみを	おもひこそやれ	三三六	ものにすまぬ	むしさへあきは	三三七
またごむと	みこそちきらね	四四六	みなせやま	むかしのはるの	一五三	ものおもふ	みとていととは	三五一
またさかぬ	はきのしたはに	四三三	みにかへは	たかなはたはし	三三六	ものおもふ	われなれはとや	三三七
またれつる	ゆふへのそらに	四四	みにしめて	みるもおもへは	二九	ものおもへは	こくのほかなる	四〇四
まちいてむ	くもまとたにも	三三三	みにつめる	おいのゆくへの	三六八	もみちせし	ききのこのは	四〇四
まつことの	とにもかくにも	一四九	みのうさの	あはれなくさむ	一四五	もみちはの	いろにいててや	四〇九
まつことも	なしとおもひし	二四	みのほとを	おもひしらぬに	二五〇	もみちはの	ちしほしらるる	二九五
まつほとの	そらにこころを	三六六	みやこいてて	かかるところの	三七四	もみちはを	かせにまかせて	四四一
まつらふね	とまりやちかく	二〇九	みやこにて	みしにはなにも	四六六	もみちはを	さそふあらしの	二五八
ましてしはし	くもりもはてし	一八	みやこひと	とはぬうらみも	四	もろともに	おなしみちとは	二四二
ましてしはし	みはななそちに	二〇六	みやこひと	みはやすやまの	四	もろともに	しのひなみたの	二四二
ましてしはし	たのめもおかぬ	三九	みやこをほ	よふかくいてて	一〇五	もろともに	すむへきやまと	二四六
まてとたに	ほとにみしかは	四六	みやまには	われをかたらむ	二九一	もろともに	ものやおもふと	二四六
まてとまぬ	かみのまれまれ	三三	みよしのの	やまほとときす	一三	や		二四
みあれとて	よよのむかしも	一七	みるひとの	なきかかすそふ	三六	やはらくる	ひかりはちに	一三〇
みすしらぬ		一五			四〇六			



行然 (法師)	三四	寂忍 (法師)	三九	禪空 (上人)	三四ノ次
教範 (權少僧都)	四〇	守門 (權律師)	三六	禪兼 (法眼)	三三
玄覺 (法師)	三三	順空 (法師)	三九	禪春 (法師)	三六
兼濟 (權律師)	六	順真 (法師)	三七	帥 (鷹司院)	二九
〔憲実 (法印)〕	三七	定意 (法師)	三四	尊家 (法印)	四〇
源勝 (法師)	一五ノ次	〔定円 (法印)〕	一八	尊海 (法師)	三三
源承 (法眼)	四〇ノ次	上海 (法師)	三六	た行	三三
源全 (法眼)	四三	定濟 (權僧正)	一三	大式 (安喜門院)	二八
公豪 (前大僧正)	一	勝秀 (法師)	一五	高倉 (安嘉門院)	一五
公宗 (法師)	四四	少将 (藻壁門院)	三七ノ次	親清女 (平)	三五
公朝 (權大僧都)	三五	定勝 (權律師)	四	親清女妹 (平)	四六
〔小督 (中務卿親王家)〕	三七	定宜 (法師)	一七	仲惠 (法師)	一七
近衛 (今出川院)	一〇	正蓮 (法師)	二九	中納言 (院) ↓ 親子 (シンシ)	
巖性 (法師)	三七	如円 (法師)	三一	中納言 (尚侍家) ↓ 親子 (シンシ)	
な・		心円 (法師)	一〇	中納言 (室町院)	一七
西円 (法師)	一七	心海 (上人)	五	澄覺 (前大僧正)	三
資円 (法師)	二九	〔親子 (典侍—朝臣)〕	一六	朝守 (法師)	三三
志遠 (法師)	一九	親道 (法師)	三五	経朝女 (正三位)	二五
慈願 (法師)	二九	聖兼 (權僧正)	二四	貞雲 (法師)	三七〇
慈性 (法師)	三七	聖勝 (權律師)	五	典侍親子朝臣 ↓ 親子 (シンシ)	
〔実伊 (法印)〕	四六	成宜 (權少僧都)	四〇	道意 (法師)	二九ノ次
実承 (法師)	三三	静範 (法師)	一四	道雲 (法印)	三九
寂恵 (法師)	四九	全家 (權律師)	七	道慶 (前大僧正)	一〇
寂音 (法師)	三三	全教 (法師)	一七	道玄 (前權僧正)	一五

人家和歌集（福田）

道勝（前大僧正）	元	猷貞（法師）	一九
導世（法師）	二七	ら行	
道日（法師）	三六ノ次	隆範（權律師）	七
道妙（法師）	一四	隆弁（前大僧正）	三
な行		良位（法師）	八
内侍（皇后宮）	四七	良覺（法印）	四三
尚侍家中納言 ↓ 親子（シンシ）		了性（法師）	三六
典侍（後嵯峨院中宮） ↓ 親子（シンシ）		良性（權律師）	五
典侍親子朝臣 ↓ 親子（シンシ）	一五	良心（法師）	六
〔二条（後鳥羽院）〕		良和（法師）	五
任弁（法師）	七		
能慶（法師）	四七		
範時女（從三位）	二五		
は行			
播磨（中務卿親王家）	三三		
弁算（法眼）	二四〇		
弁全（法橋）	七		
弁内侍（新院）	三〇ノ次		
宝遍（法師）	二〇一		
本蓮（法師）	一六		
ま行			
御座（式乾門院）	一四一		
や行			
唯教（法師）	三四		